
渴愛

虹乃 咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渴愛

【Nコード】

N 6 6 9 1 Q

【作者名】

虹乃 咲

【あらすじ】

この国には最強の一家がいる。女主人、魔法使い、医者、彼らは血の繋がりはないが主人を思う気持ちは誰よりも強い。だが女主人も彼らも一癖以上あって・・・？注：視点がころころ変わって何じゃ、この小説め！！となります 作者の趣味120%ですのでご容赦を

女王の犬（1）（前書き）

ええ、ワタクシの趣味が混じっております

女王の犬（１）

俺があいつに拾われたのはつい先日。

俺はこの国の敵対国であつた辺鄙な村に住んでいた。
だがこの国との物資の取り合いで俺の方の国が戦争をしかけた。
親父も二人の兄貴も戦に出ていつて死んだ。

残つたのはお袋と姉貴と妹とまだ歩くことも出来ない俺の弟だつた。

俺が働き手になるしかないとは分かつていた、だけど三人を奪つた相手国が許せなかった。

だからお袋達には内緒で戦場へと出かけた。

だが待つていたのは地獄。

なんとか一人でもいいから相手に一太刀浴びせようと考えていたことが甘いものだと分かった。

俺は自分の二倍もある体格を持つ男に切られた。

そしてそのまま倒れた。

血が身体から無くなっていくのが分かる。

声も出ない、最後にお袋や姉貴、妹と弟にわりいつて言いたかった。

そう思って目を閉じた。

だが何刻か過ぎた時先程の喧騒とは打って変わって辺りは静寂だった。

誰かの足音が俺に近づいてきたのが聞こえた。

俺に留めを刺しに来たのか、けどもうすぐで俺は死ぬ。

「何だ、生きてるの」

少女のような鈴のような声が聞こえたと思った途端、意識が無くなった。

次に目を覚ました時には清潔な白いシーツに包まれていた。

「ここはどこだ？」

頭が思うように働かない。

だが死にかけたせいか、身体が疲れているらしく再び眠りの世界に旅立った。

誰かの動く気配で目を覚ました。

「あら、起きたの。身体は大丈夫かしら？動かせる？」

ベッドの脇には俺のお袋より少し若いだろう、妙齡の女がいた。

「・・・誰？」

警戒をしなかったのはこの女が人懐っこい無害な顔をしてにこに

こ陽気に笑っていたからだ。

目じりに皺がより優しげな目元を更に引き立てている。
笑い顔がお袋と重なって泣きたくなった。

「私はマリア。坊や、名前は？」

「アーサー」

マリアさんと名乗る女は俺の頭を優しく撫でた。

その温もりに自分が生きていることを実感して目に涙が溜まった
がシートで目元を隠した。

「ちょっと待っててね。今、呼んでくるから」

腰掛けていた椅子から立ち上がった女の服を思わず掴んでしま
った。

ちよつと子供^{ガキ}っぽかったが今は誰かに側に居て欲しかった。

マリアさんは少し困ったように笑ったが優しく俺の頭を撫で続け
てくれた。

俺はまた眠りについた。今度は心地よい眠りだった。

だが次に起きた時は戦争で死んでいた方がましだと思った。

ゆっくりと目を開けるとマリアさんとは違う女がいた。

女は俺が起きたのに気づくと読んでいた本を置きベッドに近づいた。

無表情で俺を見つめた。

まだ頭がぼうつとしてたため俺も女を見つめた。

- 綺麗だな

働かない頭だったのにそれだけが浮かんだ。

女は太陽の光を浴びたことがないような白い肌をしていて闇のような漆黒の髪をしていた。

「ガキ、どうしてあんな処にいたの」

あんな処？俺はどこにいた、頭がはっきりとしない。

「・・・」

「どうして戦場にいた？ガキが遊び半分で来る処じゃない」

「つつ、そうだ。ここは何処だ、俺は死んだんじゃないのか」

確か、大きな斧をもった大男に切られたはずだ。
切られた所がすごく熱かったのを覚えている。

「ここはニルヴァーナ国」

「ニルヴァーナだと！なんで敵の国に俺はいるんだ！！」

「落ち着きなさい」

女に額を冷たい指で押さえられる。
ひやりとした指先は火照った身体に気持ち良かった。

だが敵国でのんびりとしていられない、身体を起こそうとしても
女に押さえられているせいで起き上がれなかった。
額の上にある女の指をどこそうとしたが少しも動かない。
俺が握ったら折れてしまいそんな手首の細さなのに、びくともし
なかった。

「お前は誰だ！？」

「おや、これは私としたことが失礼をした」

指を外し勿体ぶって深々と礼をとった。この国の礼は胸の上に右
手を置き頭を少し下げる。
たったそれだけの動きだったのに目が離せないほど優雅な所作だ
った。

「お初にお目にかかる。私はカレン、この国の宮廷護衛隊総隊長だ。
お前の国との戦で先頭をきっていたのは、この私だ」

目の前が真っ暗になった。

女王の犬（１）（後書き）

残念ながら彼は主人公ではないのだよワトソン君
私は女の子の話しか書かん！！

女王の犬（2）

「な、なんだと・・・じゃあ俺の親父と兄貴を殺したのはお前か！！」

身体が動かないのに構わず大声を出す。

腹の傷が痛んだが、そんなのに構ってられない。

「さあ、お前とやらの家族は知らんが、私が切ったのは何千人とい
るからな。そんなのはいちいち覚えててられない」

「っっ、この・・・」

罵倒したいが頭に血が上がりすぎていて言葉が出てこない。

「おや、どうした。私が憎いか？」

女が口元を釣り上げ俺を見下げる。

俺は顔を真っ赤にしながら女に飛びかかろうとしたが力が入らな
い。

言葉も出てこない。

代わりに溢れて来るのは涙だった。

悔しくて、悔しくて、でも敵を討てない自分が惨めだ。

こんなに目と鼻の先にいるのに何もできない。

「弱いから泣くんだ。強ければ守れるものもある」

「お、お前に何が、わ、分かるんだ」

せめて泣き顔は見られまいとシーツで顔を覆った。

女がベッドに近づく音がする。

俺はビクリとした。

だが女はシーツを被っている俺の頭に手を置いて出て行っただけだった。

その後にマリアさんが来た。

マリアさんは俺に優しくしてくれた。敵国にいる奴は皆が敵だと思っていたがマリアさんだけは違うかもしれない。

「なあマリアさん、あの女は？」

「あの女？」

「さっき入ってきた女」

「ああ、カレン様？駄目よ、あの女なんて言っちゃ」

あの女はカレンと言っらしい。
悪魔には似合わない名前だ。

「なんで様なんてつけてるんだ？」

「だってカレン様はこの主人ですもの。それにカレン様は私の、
いいえ私たちの主あるじですもの」

マリアさんが優しい表情をする。俺に向けられた時よりも、すごく温かい笑顔だったのでカレンという女がさらに憎たらしくなった。

俺は動かない身体をマリアさんに世話を看てもらいながら、あの女に復讐する計画を立てていた。刺し違えてもいい。俺は敵を討つんだ。

「おいガキ、とつとと家に帰れ」

俺が動けるようになった頃、カレンは言った。

「当たり前だ。誰がこんな処にいつまでもいるか」

「そうだな。だが」

急にあいつの纏^{まと}う空気が鋭くなって俺の視線と絡んだ。

「ごくり、と喉になる。」

「私に一矢報いたいと思うのは止めた方がいい。袖に隠し持っているナイフを渡せ。無駄死にするぞ。それよりは生きて家族に会いたいだろう」

息が止まった。

何で分かった。

俺は袖に隠してあったナイフをぎゅっと握った。

いつ殺そうかと伺っていたために汗ばんでいた手にナイフが滑って床に落ちた。

・カラン、磨いてあった銀のナイフは綺麗な音を出した。

しまった、ナイフが！

「・・・何で分かった？」

悔しくて奴が見れない。

「お前のようなガキに本当の戦が分かるか。いつも神経を尖らせておかないと死ぬ。そこは生きるか死ぬかの場所だ」

ああ、知らないさ。本当の戦なんて。けれど俺はあそこに行けば親父や兄貴の敵が討てるって信じてたんだよ。

「お前をサナーニヤ国まで送ってってやる。残った家族を大切にしろ」

お前に言われなくなつて大事にするさ。

優しいけど怒ったら怖いお袋、口うるさい姉貴、俺の後をくっついて来て俺の真似ばかりする妹、まだ話せないけど俺の顔を見ると笑う弟、親父や兄貴に代わって一生守ってやる。

お前なんかと言われなくなつて分かつてるさ。

「来い、セバスチャンが送ってくれる」

まだ鈍く痛む脇腹を抑えながらも外へ向かった。

外には黒い小綺麗な馬車と柔和な男がいた。おじさんと言つには若く目を細めて穏やかそうな雰囲気醸し出している。

「セバスチャン、送ってやれ」

セバスチャンと呼ばれた男は頷いて扉を開けてくれた。

「おい」

「なんだ糞ガキ」

「糞ガキじゃねえ。アーサーだ。・・マリアさんにお礼言っ
といてくれ」

「私には無いのか」

「当たり前だ」

じゃあな、俺は最後まであいつを見ないで黒光りする馬車に乗
った。

女王の犬（3）

あいつの屋敷から半刻、やっと見慣れた道が見えてきた。

あまり振動しない馬車から外を覗く。

馬車は2頭立てで、俺が乗ったことも乗ることもなかっただろう馬車の豪華さに身を縮める。振動も小さく座ったら沈む感触を楽しんだ。

もう少しで村だ。

きつとお袋は怒鳴るだろう、一週間も連絡無しで何をしてたんだって。そして俺の無事を泣いて喜んでくれるだろう。

姉貴も泣きそうな顔をして俺を抱きしめてくれる。

「アーサー、村が」

セバスチャンさんの声が緊張している。

並々ならぬその声に俺は素早く馬車を降りた。

「村が・・・」

目下に広がるのは見慣れた村、だが俺の生まれ育った村が真っ赤に燃えている。

あちこちから火の手が上がっている。

「お袋っ、姉貴!!」

俺は全速力で家へと向かう。

途中、倒れて血を流している人を見て最悪の結末が脳裏に浮かぶ。

そんな訳ない、嘘だ、嘘だっ。

息が乱れ、足がもつれながらも俺の家が見えた。

だが扉が風で開いたり閉じたりしていた。

入って家族の無事を確認したい気持ちと最悪のシナリオが頭に浮かんでいて、どうすればいいのか分からない。

ふらふらと家の中に入った。

血が逆流してるのが分かる。心臓が激しい音を立てていた。

「っっ、お袋っ・・・!」

入っただけ俺の足元にお袋が血を流してうつ伏せに倒れていた。

抱き起こして胸に抱く。けれど冷たい、息をしていない。あの優しい目が閉じられている。

「姉貴!!」

お袋の隣には姉貴、妹がいた。姉貴の腕に弟もいる。

いつもは大泣きしてうるさい弟なのに何の声も上げない。

「なあ・・・嘘だろ、嘘だっ!!」

誰も返事をしてくれない。

血は乾いていて赤黒くなっている。

「あ、あああああああああ！！」

俺の家族が、俺の大切な家族が。
一生守るって決めたのに。

もう守れない。

「大丈夫か？」

俺の肩に優しく手が置かれた。
セバスチャンさんだ。

「つつ、お前らのせいだ。お前らの国が俺の家族を」

「いや、これは盗賊だろう。若い娘がいない。多分、連れ去られたんだ」

「盗賊、その言葉にはっとする。」

そついえば村長が名のある盗賊に話を持ちかけられた、と言っていた。

あいつらか、俺の大事なものを奪ったのは、村を焼いたのは。

「許せねえ」

お袋を優しく下ろして俺はまた走り出した。

今度は心臓は正常だ、足に力も加わる。

「おい、待て」

セバスチャンさんの制止が聞こえたが止まることは出来ない。
敵を、家族の、村の敵を討つんだ。

女王の犬(3) (後書き)

次、ちょっとグロす・・・

でも私自身、グロは苦手なのでそんな酷くは無いはずで

女王の犬（４）

あいつらのアジトは分かっている。

あいつらはトゥーナ盗賊団、頭がトゥーナであり村近くの山の洞窟に住んでいる。

俺は奴らのアジトの前で中を伺った。

中から微かに人の話し声がする。

この山の洞窟は広く複雑だから奴らにはうってつけの場所だ。そつと闇に溶け込むように暗闇の中に身を踊らせた。

「がはは、やっぱり酒はいい。全くさつさと渡してりゃいいものを、あの村ときたら」

「本当っすよね、頭あ」

洞窟の中で火を焚きながら盗賊が20人近くいる。

「後は女を売るだけだな」

下卑た声と一緒に酒を一気に煽る、がたいのいい男たちがいた。

憎い、あいつらが。人の命を奪っておきながら笑いやがって。

俺は持っている鎌をもう一度握り直した。

「そういえば1人惜しい女がいましたね」

「ああ、あの女か。なかなか上玉だったのにな。赤ん坊だいて、この子だけはって最後まで抵抗してやがったな」

「あの女、綺麗な深緑の髪でしたのにね。ありや高く売れたのに」

- - 深緑、俺の村では俺の家族しか緑の髪はいない。
俺の姉貴は村で一番の器量だった。

感情に委^{まか}せて頭を一気に狙おうと身を岩陰から出したがその前に目に火花がちった。

「がつ・・・！」

「おい頭、変なガキがいるぜ」

しまった、まだいたのか。

目の前の敵にしか注意していなかったために、後ろから近づいてきた奴に油断していた。

俺はあいつらの頭、トゥーナの前に連れていかれて身体を縄で縛られた。

「つつ、殺してやる！」

「おいおい、そんな姿で何を吠える」

芋虫のように転がされたが俺はトウーナを真っ直ぐ睨みつけた。
トウーナは下卑た顔で俺を嘲笑っている。
それに合わせて周りの奴らも笑う。

「つぶ、つぶ!!」

仲間が俺に蹴りをくらわせる。

「ふざけんな、俺の家族を村を、人の命を何だと思ってやがる!」

「調子にのるな、ガキが!」

「うっ!」

腹に蹴りが入れられる。

ちくしょう、せっかくマリアさんに手当てしてもらった傷が開いた。

「うるせえ」

次々とまるでゴミのように蹴られる。もつ意識が朦朧としてきた。

「畜生、ちくしょう、ちくしょー!!」

俺が強ければ皆を守れたのに、力があればこんな奴ら。

「弱い奴が吠えても何もならねえ。それが世の中ってやつよ」

「同感だな」

こんな下卑た場所に似つかわない凜とした声が響いた。

「つぎやあああ!!」

悲鳴に腫れた顔を上げるとトウーナの右腕が無くなっていた。鮮血が吹き出る。

トウーナの横に立って剣を構えているカレンがいた。

「ああ、私もそう思う。力こそが全てだ」

細長い綺麗な剣を持っている。その切っ先は血が滴っていた。

「だ、誰だ!？」

「今から死ぬ奴らに名乗っても仕方ないだろう」

血を吹き飛ばし手下共に襲いかかった。

まるで鬼、圧倒的な強さ、頬にかかる血、目にも止まらぬ速さで散る漆黒の髪。

――ああ、なんて美しく禍々しいんだ

惚けていると後は頭だけとなった。

俺の周りにいた奴らはセバスチャンさんが片付けていた。

あの柔和な顔は消え、無表情で俊敏に動く。

「あ、ありがとうございます」

セバスチャンさんが俺の縄をナイフで切ってくれた。

「さあ、どうして欲しい？」

片腕を失った頭にカレンが悠然と話しかけた。

「ひつ、助けてくれ」

あんなにいた味方は、もういない。

「村の人達もそう言ってたかもな」

「待ってくれ、あんに奪った物はやる」

「あいにくと財宝には興味が無い」

「なら女はどうだ、高く売れる」

「下衆^{ゲス}が。その耳障りな声はやめてくれ」

剣を口に差し、そのまま強く横に引いた。
口が裂け、顔の肉がはがれた。

「つつ、ギヤアアア」

血が口から腕から出て行く。

俺はただ見てることしかできなかった。

「おいガキ、敵を討ちたいか」

カレンがのたまうちまわっている奴の顔を足で踏みながら俺に顔を向けた。

「・・・いいよ、こんな奴」

俺の怒りは全てカレンが晴らしてくれた。だからこんな男で憂さ晴らしをしても意味が無い。

「だ、そうだ。良かったな」

男はほっとした様子だった。だが安心したのも束の間。

「っが・・・」

カレンは心臓を一突きして命を奪った。

「セバスチャン、この奥にいる娘達を」

「はい」

カレンは剣を払い、血で汚れた剣を盗賊達の服で拭いた。

「ちっ、余計汚くなっただな」

苦々しく呟いて剣をしまった。

「ありがとう」

「何がだ？」

「村の敵を討ってくれて」

「礼ならセバスチャンにするといい」

そう言っ て俺に背を向けた。

「俺に強さを教えてくれ」

俺は泣きながら喚いた。

俺は自分の腫れた顔や唇が切れて悲惨な顔になっているのに続ける。

「強ければ守れるんだろ。誰にも何も言われないで。だから頼むよ、俺に剣を教えてくれ」

「甘ったれはいらない」

「お願いだ、絶対に弱音は吐かない」

「どうだかな」

「本当だ、俺の命をかける」

「・・・私は厳しいぞ」

カレンは足を止め、やっと振り向いてくれた。

「
ああ」

そうして俺は血で染まっているカレンの手をとった。

女王の犬(4) (後書き)

ふう、やっと一段落・・・

えっ？意味が解らない？

ええ、自己満です

慈愛のマリア（1）（前書き）

やばいっす!!

狂った愛と書いて狂愛と読む

その心は・・・

慈愛のマリア（１）

私があの方に拾われたのは今から３０年と３ヶ月と２１日となりました。

あれは私がこの国の最貧困街にいた時でした。

私は娼婦の母親と顔も知らない父親を両親に持ちます。

私は５歳になるまで母親に育てられておりました。

けれど母親に恋人が出来た途端に捨てられました。

恨みが無いと言えば嘘になりますがあの母親によく子育てが出来たものだと思います。

捨てられた後、私は生きるため盗みを働いておりました。私と同じ境遇、両親がいない子供と一緒に道路の片隅で寝たり、物乞いをしたりもしました。

だけど６歳になる少し前、その日は朝から雨が降っていました。雨を凌ぐと食事屋の軒下で雨宿りをしていましたが店主に薄汚いと殴られ雨が降り続ける中倒れました。

その日は２日前から何も食べていなくて意識が朦朧としていたのです。

何も考えられなくて目から雨と同化して涙が流れました。

けれど意識を失う前にふと雨が止まった気がしました。

起きると清潔な白のシーツにくるまれておりました。
けれど空腹のため起き上がることが出来ません。

ふと良い香りがしました。

なんとか首を動かして匂いの元を辿ると枕元にある器から漂ってきています。

目の前の食べ物を見るとお腹が鳴りだしました。

唾液が大量に溢れてくる、だけど身体が動かない。

そのことがもどかしくて涙が溢れ出て真っ白なシーツを汚しました。

嗚咽をあげている時ドアがゆっくりと開きました。

「起きた？」

何とか首を動かすと綺麗な女性がいました。

この国ではほとんど見ない漆黒の髪と黒い瞳。見た目は20前の女性のように思われます。

女の方は私に近づいて私の涙を拭き取りました。

「どうした？」

優しい声で話しかけてくれました。

「・・・お腹が」

綺麗な女の人を前にしてやせ細ってお腹ばかり出ている自分が恥ずかしくなりシートで自分の顔を隠しました。

「ああ、食べられる？」

こくりと頷くと彼女は何ヶ月も洗っていない私の頭を支え起こしてくれました。

そして空腹で腕さえ上がらない私の代わりにシチューを手づから食べさせてくれました。

「おいしい？ ゆっくり食べないとお腹が悲鳴を上げるよ」

皿ごと食べそうな私に優しく話しかけてくれました。まだ私が食べたそうな顔をしたのを見て彼女は微笑みながら私の頬を撫でてくれました。

「おかわりいる？」

「・・・」

こくん、と首を少しだけ動かしました。

こんなに優しくされたのは初めてで何かあるのかと疑ってしまいました。

でも、柔らかいベッド、美味しい温かい料理、それだけ頂ければ充分だと思いました。

「じゃあ、ちょっと待ってて」

空の器を持つて扉を出ていきました。

少し満たされたお腹のおかげで頭がしつかりと働き始めました。もしかして人買いか、けれど私にご飯を食べさせてくれる要素なんてありません。

じゃあ何だろう、彼女の考えていることが全く分かりませんでした。

私は下町で育つたため無条件の優しさというものが分からなかったのです。

また扉が開き、彼女が戻ってきました。

手には湯気が出ている先程と同じものが倍の量で入っていました。

「はい、召し上がれ」

私はまたマナーなど関係なしに犬のように食べました。さすがに2杯も食べたため満腹になりました。

「よく食べたね。じゃあ聞いていい？」

彼女は私のゴミや泥がついた髪を撫でながら優しくな口調で尋ねます。

手が汚れてしまうのもお構い無く髪を梳いてくれました。母親にもされたこともない行為に身体が跳ね上がりました。

「あ、ごめんね。嫌だった？」

「違う」

そうじゃない、けれど言葉が稚拙な私は言いたい言葉が出てきま

せん。

彼女は困った顔をして髪から手を離しました。私はあの心地よい冷たい手が離れて残念に感じました。

「あなたの名前は？」

「・・・」

もちろん私に名前はありました。母親がつけた名前が。けれどその名は嫌な名前でした。

少し文字をいじると汚い言葉になるからです。

こんな名前を綺麗で優しい方に呼ばれなくなかったのです。何も答えない私を見て彼女はまた困った顔をしました。その顔を見ると胸がきゅっと締めまりました。

「じゃあ親は？」

「いない」

捨てられたのだから親では無いはずです。

「そっか。じゃあ一人？」

「うん」

「じゃあ一緒に暮らさない？」

驚いて微動だに出来ませんでした。

「だめかな？」

彼女は手を合わせて首を傾けています。

とても可愛らしい仕草に心が温まりました。

「・・・でも」

私はまた捨てられるのを恐れました。

母親に捨てられた時、あんな母親でも心に穴が開きました。

そして、お腹の中が真っ黒い何かで一杯になったのです。当時はそれを分かっていますでしたが、あれは憎しみと怒りとほんのちよつとの悲しさでした。

「私も一人で寂しいの」

「あなたも？」

信じられませんでした、こんなに綺麗で優しさに溢れている女の人が独りだとは思えなかったのです。きっと彼女には優しく素晴らしい旦那様がいて温かい家庭があるのだと疑っていませんでした。

「寂しい？」

「ええ」

「悲しい？」

「ええ」

「つらい？」

「ええ」

彼女は優しげな、でも悲しそうな瞳で私を見ています。

私がいたら、ほんの少しでもこの綺麗な人を笑顔にさせてあげられるかもしれない、今にして思えば何と傲慢な考えだったのでしよう。

「じゃあ、一緒にいてあげる」

でも私は彼女の手をとりました。

慈愛のマリア（1）（後書き）

怖いです・・・

自分で書いておきながらビビってます

慈愛のマリア（2）

それから私は字を教わりました。

私は元気になった後、カレン様手ずから字というものを教わりました。

「マ、リ、ア、書けた。ねえ、カレン様。私、自分の名前書けたよ」

「ええ、上手ね」

私がカレン様から頂いた名前はマリア。

この名前はカレン様の国で尊い人の名前だそうだ。そんな大層な名前を頂いていいのかと戸惑ったがカレン様がせっかくつけてくれた名前なのだから私は素直に喜んだ。

マリア、マリア。カレン様が私の名前を呼んで下さるのがとても嬉しい。

一緒にお風呂に入ったり寝てくれたり、ご飯を作ってくれたり私の母親がやってくれたことのないことをやって下さった。

私が新しい言葉を覚えるとカレン様は喜んで下さり、私が料理を作るのを手伝うと笑って下さった。

それが本当に嬉しくて私はどんどん知識を吸収したり料理を覚え

た。

カレン様は私が大きくなると身を守る術を教えて下さった。

カレン様はたまにお仕事に出かけてしまったため、カレン様の大きな家にいるのは私だけになってしまった。

カレン様が少しでも私の側を離れるのはひどく寂しいものだったがカレン様を煩わせることなどできない。

カレン様がない時はカレン様と呼んだ先生と一緒に学ぶ。

先生の話はとてもおもしろいものだったがカレン様のお話に比べたら霞みがかかるものだ。

その位、私の中でカレン様が一番の存在となっていた。

だが、ある時それは変わった。

カレン様が帰ってきた時、薄汚れた男の子を拾ってきたのだ。

その子は私がカレン様に拾われる前と同じように荒んだ眼をしていて今にも何かにとびつきそうだった。

「カレン様、誰？」

カレン様は私に気がつくやと男の子から顔を外し顔を私に向けた。

「名前は・・・セバスチャンでいい？」

セバスチャンと呼ばれた私よりも少し小さい男は返事もせずカレン様に身を預けていた。

その時、私の中で何かが音をたてて崩れた。

何故、何故なのですか。

私だけではあなたの寂しさを埋めることができなかったのでしょうか。

だから新しい子を、私はもう必要ないのでしょうか。
私の心は泣いていました。母親に捨てられた時以上に。
けれど嫉妬に狂った私の顔を見られたくなく、私は平然として
るように努めました。

「セバスチャン、今日と一緒にお風呂に入ろうか」

カレン様がセバスチャンを連れてお風呂場に向かいます。
私とカレン様のお風呂に。

「カ、カレン様！」

「ん？どうしたマリア。いい子にしてた？3日前より賢くなった顔
つきだ」

普段なら声をかけて下さるだけで嬉しいのに今は何の喜びも湧い
てきません。

私がいつも一緒にお風呂に入っていたのに。
けれど今日もカレン様は帰って来ないと思い、私は先に入ってし
まったのです。

「マリア、先生から聞いたのだが料理が上手になったんだって？私
たちに振る舞ってくれないか」

「は、い」

そう私に言って2人で私の前を通っていきました。
あの男は私に一瞥もくれないで暗い瞳のままカレン様に背中をお

されて行きました。

2人の背中が見えなくなったあとに私はやっと動き出しました。カレン様のために磨いていた料理の腕。一番に食べさせるのはカレン様だけなのに何故あんな男に食べさせなければならぬのか。

「カレン様」

今はお風呂場にいる私だけの主を悲痛の叫びで呼んだ。

お風呂から出てきた2人は私の料理を食べた。
正確にはカレン様だけだったが。

男は何も動かず、ただ料理を見ているだけだった。

「マリア、とっても上手だな」

「ありがとうございます」

本当はカレン様だけに食べて欲しかった。
けれどそんな思いは微塵にも出さない。

「セバスチャンは食べないのか？」

うんともすんとも言わない彼に怒りは募っていきます。

結局一口も食べなかった彼に安心しながら残った彼の分をどうしようか迷ってました。

「いいよ、マリア。マリアが作った初めての物だから。私が全部食べるよ」

ああ、さすがカレン様。嬉しくて胸が躍ります。

私はセバスチャンに目もくれないで、ずっとカレン様を見続けました。

「カレン様、今日は一緒に寝てもいいですか？」

カレン様がいる時はいつも私と一緒に寝てくれるため、少し恥ずかしく思いながらも勇気を出して言いました。

「ああ、けれどセバスチャンも一緒にいいか？」

「え？」

「駄目かな？」

「いえいえ、邪魔でしたらいいんです。カレン様がいらっしやらない時はいつも一人ででしたから大丈夫です」

私は皿の片づけもしないまま椅子から立ち上がり自分の部屋に向かいました。

カレン様の声が聞こえましたが私はカレン様にこの醜い顔を見ら

れたなくて廊下を走って部屋に向かいました。

部屋に着くと扉を閉めて扉を背に崩れ落ちました。

「カレン様、カレン様」

今まで堪えていた涙が堰を切ったように溢れ出ました。

慈愛のマリア（2）（後書き）

マリア、おお、マリアー

いや、ただ歌いたくなっただけです

慈愛のマリア（3）

私が涙を流しながら枕に顔を押しつけていると扉が静かに開きました。

カレン様だ、私は息を止めて寝ているように静かにしました。

「マリア？」

やはりカレン様でした。

カレン様はベッドに近づき私の顔を覗きこみました。

ですが私はうつ伏せになっているためカレン様の顔を見ることができません。カレン様がどんな顔をしているのか気になりましたが私の泣き顔は見られなくなかったです。

「マリア、ごめんなさいマリア。あなたを大好きなのは分かるでしょう？私はマリアを愛してマリアは私を愛してくれるけれど、あの子には愛してくれる人がいないの。だから、私たちが彼を愛してあげましょう。マリア、マリアという名前は慈愛という意味。だから多くの人を愛してあげて」

カレン様は私の頭に口づけを落とし、いつものように優しく私の頭を撫でて出て行かれました。

慈愛のマリア、カレン様が私にそれを望むならカレン様がそうあって欲しいと望むなら私は……。

翌朝、私は泣いて腫れた顔を冷えた水で冷やして朝食の支度をしました。

カレン様に今日も喜んでもらわなければ、それが私の役目なんだから。

仕度をしているとカレン様がさっぱりとした顔をして厨房に入ってきました。

カレン様はいつも朝にシャワーを浴び、眠気を飛ばすのです。

「お早う、ございます」

一瞬止まったのはセバスチャンがカレン様と一緒に入ってきたからです。

昨日は暗い瞳にしか目がいきませんでした。が彼は綺麗な茶髪をしていて小綺麗な身なりをしています。私のどぶ色のような灰色の髪とは天と地の差です。

憎しみがありませんでしたが昨夜のカレン様の顔を思い出しました。

そうだ、私は慈愛のマリア。

かなり時間がかかりそうでしたが私はこのセバスチャンを愛そうと決めました。

カレン様がそう望むのだから。

セバスチャンと出会って早、24年がたちました。
彼は出会った時より、とても柔らかくなりました。
そして彼はカレン様の執事となりました。

そして・・・私の旦那様となりました。
私としては、ずっと一人でカレン様を守っていかうと思っていた
のですが私はきっとカレン様より早く死んでしまうと分かったの
です。

それはセバスチャンも同じで私と彼は2人の子供が私たちに代わ
ってカレン様を守ってくれるよう願ったから夫婦になりました。

彼は最初、カレン様の前でしか笑いませんでした。
私に向ける顔と言えれば自分がカレン様と独占しているという挑戦
的な笑みでした。

今では彼は私と子供たちに時々笑うようになりました。

当初は彼と私でカレン様の取り合いをしておりましたが今では家族の皆で取り合っております。

ですがカレン様と最初に出会ったのは私であり、カレン様と一番長く付き合っているのは私であります。

ですから行き成り出てきた、ひよっこ共には負けません。

これからも私はカレン様一筋です、まあたまに旦那様を入れてやってもいいです。

慈愛のマリア（3）（後書き）

セバスチャンって必ず必要な人物っすよね
執事〃セバスチャンですし

皇子暗殺事件（１）（前書き）

お次は第三者視点からお届けします

皇子暗殺事件（１）

現国王が病で床に伏せっている。

そんな噂がどこから漏れたのか王都に広がっている。

もちろん、臣下たちは否定しているが民は次の国王は誰かと噂しあっていた。

「全く、何て面倒なんだろうね」

「・・・面倒と言う前に手を動かして下さい」

部屋の中に男女がいる。

一人は椅子に座り山積みとなった書類を片付け、もう一人は長椅子に仰向けになって片手で長い黒髪を弄っている。

「い、や」

「ええ、言った私が馬鹿でした」

「ねえ、ルチア」

ルチアと呼ばれた茶髪の細身の男が書類から顔を外さずに返事をする。

「なんですか」

「王都にまで噂が広がってるわ」

「・・・」

何の噂かルチアは分かっている。だが手を出すな、と上から指示が出ている。

「ぼけ狸じじい共に任せても何も変わらないのにね」

「・・・」

いつも彼らの命令は遅いのだ。全てが終わりそうになってからやっと重い腰を上げる。

「カレン、だったら動いて下さい」

ルチアは手を止めて彼女を見る。

彼女はいつも世を嘆く。そのくせ何もしないのだ、自分には関係ないと。

「どうせ次の王も愚王よ」

では何故カレンは王に仕えるのか、ルチアはそれをカレンに聞いたがはぐらかして何も応えない。

憂いを帯びて影を落とし守ってあげたいとも思わせるカレン、でも彼女に関わるなと本能が告げる。

カレンは得体が知れない女なのだ。彼女は自分が仕える前からこの国に仕えていた。王都で見かける町娘と同じように細い身体つき、見た目からしてこの位の女性は既に家庭を持って家に従事しているはずだ。

だが彼女はこの国の宮廷護衛隊の総隊長だ。どこにそんな細腕に力があるか分からない。

ルチアは隊を鍛える彼女を数える程しか見たことがないが、あんな筋肉が脳にまで詰まっているようなむさ苦しい男たちの中に綺麗に咲き誇っていた。

まるで孤高に咲く一輪の薔薇のように。しなやかな動きと目にも止まらない剣さばき、初めてルチアは彼女を美しいと思って呆然としたものだ、あの性格を知るまでは。

だが隊にすれば彼女は鬼神だとか、通り名まであるそうだ。

「私は第2皇子に期待してますよ」

第2皇子は御年17歳。後ろ盾がないが知識が深い、その上常に民のことを考えている、まさに王になるに素晴らしい人物だ。

だが第1皇子がいる、彼は臣下の人形だ。自分の意思がない、彼を王に仕立て上げると城下は混乱するだろう。

近いうちに権力争いが始まる。

「あなたは誰につくんですか？」

「そうね、世界を変えてくれる人に」

そう抽象的なことを言っているかわず、それ以上は踏み込むなという合図だ。

「舞踏会に駆り出されるな」

邪魔な皇子を消すには近日開かれる舞踏会だろう、誰が犯人か分らないが皇子達が狙われる。

共倒れにならないければいいのだが、と思うが宮廷護衛隊のカレンは呑気なことを言ってるられない。

総隊長のため指令を出さなければいけないのだが、こんなところでのんびり紅茶を飲んでいる。

「つつ、いた　！！」

いきなり扉が勢いよく開いた。多分、扉付近にいたら潰されていた程の強さだ。

「あれ、ヨザック。今日は一段と髪が乱れてる」

「そりゃあ、カレン総隊長をあちこちの部屋中を探してたからですよ。さあ、鍛錬のお時間ですよ」

「ルチアと大事な話してるもん」

「いえ、どうぞ。丁度終わったところです」

間入れず、ルチアが答えた。

「じゃあルチア様の快いお返事を頂いたので行きましょう」

「うらふりふおの！！」

本人は裏切り者と言いたいのだろうがヨザックに連れて行かれる

と分かった瞬間、口に侍女たちが作ったお菓子をこれでもかと詰め込みながらヨザックに引き摺られて行った。

皇子暗殺事件（2）

「だから言っただじゃない」

カレンの足元に転がるのは50人ほどの隊員、しかも全員呻いている男という有様だった。

「暇つぶし位にはなっただんじゃないすか」

宮廷第3番隊3席のヨザックが荒い息をしながら地面に転がっていた。

「・・・本当にそう思ってる？」

「・・・俺たちじゃ運動にならないのは分かってますよ。けれど少し位隊員と親睦を深めた方がいいですよ」

「余計なお世話だわ」

カレンの動きは型にはまったものではない、それ貴族たちが優雅さを求めて嗜むものとは違う。

カレンに型などない、自己流だ。それは確実に少ない動きで相手を殺すもの。金的を狙おうと急所を狙うのが汚いなどと戦では言われてられないのだ。

だからカレンは容赦なく蹴りや眼を狙ってするため、隊員も剣だけではなく予測不能なことまで受けなければならず、通常よりも疲労が激しい。だからこそ相手ができる人がいないのだと、他人を怪我させると鍛錬から逃げまくってたが隊員たちはそこそこ力をあげてきたらしい。

「ふむ、ヨザック。最後に切りかかった時に僅かに脇腹に隙ができた。サイナスは真っ向から向かってくるな、必ず相手の死角を狙え。ツニヤータは・・・」

こうして計47人の直すところを述べ息も乱してないカレンは鍛錬場を後にしようとした。

「ま、待って下さいよ。隊長たちから絶対に帰すなって言われてんすよ」

痺れる手首を回しながらヨザックが背を向けたカレンに息を切らしながら喚く。

「なんならヨザック、お前が私を止めるか」

そのまま振り返りもせずには出口に手をかけた。

「おや、これは総隊長殿」

ふわりとする茶髪をたなびかせながら綺麗な男と出くわした。

「相も変わらずお美しくいられる」

しかしカレンは黙ったまま横を通り過ぎた。

「おや総隊長ともあるう気高く一輪の薔薇のようなお方が下等生物のように僕に何も話しかけずに行ってしまうのですか」

「・・・あらハナブキ副隊長。ごめんなさい、私、茶髪の男は視界に入らない病気なの」

ちなみにこの国の人の7割が茶髪である。
もちろん、隊のほとんどが茶髪だ。

「病気？それは大変だ。こんなお綺麗な女性の顔が苦痛に歪むなんて僕には耐えられない」

ハナブキは片手を額に乗せると緩く頭を振りカレンを恋人のように甘く見つめる。

また始まった、と地面に伏せている男たちは思った。

「だからどいてちょうだい。邪魔なの」

「君の歩く道を塞いでしまう僕は罪深い男だね」

「ええ、すごく邪魔」

ハナブキ副隊長は規律が厳しいことで有名な宮廷5番隊の副隊長だ。

彼は女にもてる。この前はメイドといった所を目撃されたと思ったら先週には全く違う下女と逢瀬を楽しんでいた。

だからカレンも口説かれていると隊員は分かっていた。あいつは

命知らずだと。

だがヨザックには分かっている。
彼は本当はカレンが大嫌いだと。

ハナブキは全ての女に甘いわけではない。特にカレンは嫌悪という状態に近い。

カレン家に住んでいる人は全て拾い子だ。そのためカレンに絶対服従を誓っている。棄てられた子にとって拾ってくれたカレンが全てだからだ。

それをカレンは分かっている。そして捨て子がいるとすぐ家に住まわせると聞いたことがある。つい先日盗賊に家族を殺されたというまだ子供を拾ったとの報告があったはずだ。

一見すれば善行のようだがカレンは拾った子たちを自分の手足として動かしている。

だからハナブキ副隊長はカレンに眉を寄せているのだと思う。
そして多分これはヨザックの感だがカレン総隊長は分かっている。

それなのにあの甘い言葉に耳を傾けるとは性格が悪いと言つか度胸が据わっていると言つかだ。

「けれどカレン殿、あなたには隊長からのお小言があるためここで待っているように指示がございませんでしたか」

「さあ、聞いてないわ、ヨザックの伝え忘れてないかしら」

えっ！？ここへきての俺？

ヨザックは総隊長を睨むこそしないがその小さな背中に視線を向

ける。

「ねえ、ヨザック。私は聞いてないわよね。そんな話」

「・・・はい」

自分の隊長に怒られるか、それとも総隊長に半殺しにされるか苦渋の決断だった。だが命をとった。

「ほら、ヨザックもそう言ってるわ」

「駄目じゃないか。ならカレン殿の可愛い耳に入れておきましょう」

キザったらしく自分の唇をカレンの耳元に寄せて囁いた。

「明日、舞踏会について。いつもの場所で、だそうです」

カレンはそれを聞くと返信も頷きもしないで今度こそ出ていった。

「本当・・・」

残ったハナブキは眉を寄せながら見送った。

皇子暗殺事件（2）（後書き）

なんか急になっちゃんが飲みたくなった・・・

皇子暗殺事件（3）

ある一室にはまだ青年とイかない一人の男と今にも地に伏しそうな隊服を着た男がいる。

「ナギ様、どうか明日の警備に手を貸して下さい」

「えー、やだよー。だって僕、今はねえ蟻の生態系を観察するのに夢中なんだ」

鳥の巣のようにぐちゃぐちゃな桃色の髪をふわふわさせながら椅子に座るナギが答える。

対する隊員は土下座に近い状態で泣きながら訴えている。

「ナギ様が手伝って下さらないと俺、殺されます」

「大丈夫だよ。人間そんなに弱くないって」

「お願いです」

「だって蟻がちまちまと動いてるんだよ、僕たちの一步が彼らの百歩にも千歩にもなるなんて可哀そうだねえ」

自分の話より蟻の方が優先順位が高いらしい、もはや絶叫に近い。

「つつ・・・！」

隊員が自分の死を覚悟して諦めようとした時、勢いよく扉が開いた。

二人が一斉に扉から来た人物を見つめる。

「あっカレン様あ。どうしたの」

「ナギ、明日の舞踏会手伝いなさい」

「うん、いいよ」

「なっ・・・！」

先程の自分の悲痛の叫びは何だったんだ。

「サイアス、説明は？」

カレンが一本に束ねている黒髪を揺らしながら土下座していたサイアスを振り返る。

「い、いえ。まだです」

「時間が無いの、早くしてちょうだい」

「そうだよお。カレン様も僕も忙しいんだから早く言ってくれないとお」

今まで拒否してた男が何を言うか、目の前の自分より倍下の年の

男にサイアスは腹が煮えくりかえりながらも声を抑えて説明する。

「カレン様は、どこにいるのお？」

「ぶらぶらしてるわ」

「一緒にいてもいい？」

「邪魔になるから。終わってからにして」

「わーい」

冷たい総隊長によく敬語も使わずにいられると驚きながら国一番の魔法使いを見る。

「サイアス、いつまで床に座ってるつもり？時間が無いって言うでしょう」

「そうだよー、カレン様を煩わせちゃ駄目だよ」

「・・・はい」

言いたいことは山ほどあるが自分は彼らより一段と強さも地位も

格下なのだ。

ただ自分の後頭部の心配をするしかない。

「じゃあ頼んだわ」

「はい」

カレンはサイアスの襟首を引きずりながら出ていった。

「ちょ、カレン総隊長。首が、首が締まる、うっ・・・」

サイアスはやはり自分の薄くなった頭部を心配するのだった。

皇子暗殺事件（４）

華やかな舞踏会、誰もが笑いながら王宮の広間で国お抱えの音楽団の曲を聞きながら優雅に踊り夜を明かす。

あちこちに着飾った男女が柱の影に隠れ秘め事をしている姿もあれば、ある貴族の令嬢を取り囲む男たちの姿が見えたり恰幅の良い白髪混じりの男たちがワインを片手に談笑している姿が見える。

「あの令嬢に話しかけたいものだね。見てごらん、ヨザック。あの濡れた瞳、ふわりと染まる頬、そして小さな赤い唇」

「・・・はいはい」

ヨザックとハナブキは並んで広間を警備している。
他にも隊服を着た男たちが眼を光らせながら佇んでいた。

己の隊長たちは各皇子の側に張り付いている。

「全く、貴族たちは暇なんすね」

「貴族は自分の美貌をひらやかすのが仕事さ」

ハナブキは自分の髪を弄びながら視線は女性を追っている。

「ああ、あちらのご婦人は僕を待っているようだ」

「ちよつとハナブキ副隊長。俺たちは警備中・・・」

一瞬、騒がしい位のざわめきが消えたと思つたら入り口に皆の視線が集まっていた。

「すげ・・・」

ヨザックが眼にしたのは紅、紅で全身を覆つた夫人だ。

紅いドレス、紅い靴、紅い髪、まるで生き血を吸つたように紅い唇。誰もが眼を奪われた。

呆然としてる中、その人物は壁際により一人壁の華となっている。だが彼女を放っておく男たちはおらず、瞬く間に華の蜜を吸おうと虫たちが群がった。

「お美しいご婦人、あなたのお名前を伺つてもよろしいでしょうか」

「私はドルツエ子爵と申します。ああ、あなたの口から小鳥のような囁きを聞きたいものです」

「良かったらワインでもどうぞでしょう」

何人もの貴族であろう男たちにより彼女の姿が見えなくなった。

「凄いつすね、ハナブキ・・・ってあれ？」

今までのすぐ隣にいたハナブキが消えている。

もしや、と思つて群がる男たちの中を見るが如何せん多すぎて見
つからない。

「美しいご婦人、こちらへ」

いきなり手を引かれたと思つたらハナブキが鮮やかにあの群れか
ら脱出し人気のないテラスに連れて行つた。

「僕はハナブキです。あなたのお名前を伺つても？」

「・・・スカーレットとお呼び下さいな」

「・・・スカーレット」

「あら、どうかなさつて？」

「いえ、あなたに似合うお名前だと思ひまして」

まあ、お上手ですこと。スカーレットは手にした扇を広げ自分の
唇を隠し上品に笑う。

「ハナブキ様は宮廷護衛隊のお方かしら？」

「ええ、第5番隊の副隊長を務めさせて頂いております」

「まあ、お強い方でいらつしやるのね」

切れ長の目が一層細くなり紅い唇は緩く弧を描いた。
ほのかに薔薇の芳しい香りがしてその白い肌に身を寄せたくなる。

「護衛の方が私と一緒にいてもよろしいのかしら」

「今はあなただけの護衛ですから」

「まあ」

スカーレットは頬を染めながらハナブキを見つめる。

ハナブキはスカーレットの紅い結った髪を一房とり口付けた。

「このままあなたと一生過ごしたいものだ」

「このまま抜け出してしまいませんか」

スカーレットが唇をハナブキの耳に寄せ囁く。

「叶うことなら全てを投げ出してそうしたい」

「まあ、できないのですか？」

スカーレットが顔を曇らせる。

「今はこの安全を守らなければならないのです。もちろんスカーレット、あなたを含めて」

「私だけを守って下さらないの？」

「いつも僕の心はあなたを守っていますよ」

まあ、スカーレットは恥ずかしげに笑い、ハナブキと距離を取る。

「スカーレット？」

「私^{わたくし}、あなたと話していると恥ずかしくて喉が渴いてしまいましたわ。少々飲み物を取ってきますわ」

「いえ、僕が行きましょう。あなたはここで夜風に当たりながら熱を冷ましていて下さい」

「ええ、お言葉に甘えて」

ハナブキは給仕をしている男に近寄りワインの入ったグラスを二つ貰った。

持ってテラスに出るとスカーレットの姿が消えていた。辺りを見渡すが影も形もない。

「あー、ハナブキ副隊長！どこ行ってたんすか。早く担当警備場所に戻って下さい」

ヨザックに腕を引かれてやむを得ずスカーレットを探すのを諦めた。

それを確認した一対の瞳が物影に身を潜めた。

真つ 赤な唇に嘲笑を残しながら。

皇子暗殺事件（5）

「あら、ナギ。ちょうど良かった。来なさい」

「あー、カレン様。今日は一段とおめかししてるう」

カレンは潜伏するために今日はいつもの飾りつけない隊服を脱ぎ、ドレスを着ていた。

ぼさぼさの髪を直してもいないが今日だけ上等な服を着ているナギはカレンに腕を引かれて広間を後にする。

そのままテラスから庭園に行き草藪に隠れる。

「まあオディエン様、お戯れを」

そのままカレンは自分の肩を露わにしオディエンと呼んだナギにしかれる。

まるで秘密の逢瀬を重ねる婦人と貴族の男のようだ。

「そう言うな、俺もお前に会えて嬉しいのだ」

いつもは頭に春がきたように話すナギだが今はいつもの声色とは違い、低い美声で囁いた。

そのまま二人はゆっくりと抱き合い、カレンは何度もオディエンと呼ぶ。

そのたびにナギは返事を繰り返す。

ナギの手はカレンの露わな背中に置いてある。

「オディエン様あ、もう私、早くしてくださいなあ」

「そう焦るな」

そう言つてカレンは性急にことを進めようとナギの服を脱がしにかかった。

上の服を全て脱がし外気に肌を触れさせる。

そのまま直に肌に触れた。

カレンの冷たい指先がナギの肌をくすぐる。

その時だった。

行き成り草藪から音がしたと思つたら全身を黒い服で覆つた人が二人の前に姿を現したが、ナギの姿を見て動きが止まった。

「貴様、謀つたな」

「ふん、馬鹿な暗殺者だな」

カレンは自分のドレスを勢いよく持ち上げ足に忍ばせておいた短剣を取り出し、向かい合う。

わー、大胆、とナギの間抜けな声が入ったが両者は視線を合わせながら微動だにしない。

「そんなもので俺が殺せるとも？」

「当たり前だ」

カレンはドレスをたなびかせながらも短剣を握りしめ相手に一気に近づいた。

あまりにもカレンが素早く動いたせいか、暗殺者は体勢を崩し、距離を取ろうと後へ後退する。

だがカレンはその隙を与えず相手の懐へと入り込んだ。

「つつ・・・！」

「おや、なかなか腕がいい」

確実に心臓を狙ったが相手は間一髪、服を裂き肌を掠めただけだった。

血がうつすらと滲みでた。

「私としては、早く捕まって全て吐いてくれると嬉しい。例えば前は側室、サラニーナの手の内のものだとかな」

「・・・」

相手は息を飲んだようだ。それは普段と変わらない呼吸と同じように聞こえたがカレンは微かな戸惑いも見逃さない。

「ふん、何とも馬鹿な側室だ。手を出さなければ平穩に後宮で暮らせたのにな」

言いながらも動きをやめない。

「お前はどちらがいい。このまま死ぬか、それとも死んだ方がましだと思える地獄を味わうのと。私が問いただす方が優しいが中には変態趣味がいてな、拷問が生き甲斐という奴がいる」

鋭い、急所ばかり狙ってくる攻撃に相手は押されながらも少しずつ後退していく。

カレンの力量が分かったのか、暗殺者は逃げようとちらりと隙を探す。

あそこなら行けるかもしれない。

「な・・・」

だが逃げようと足を出したのに動かなかった。まるで地面に足が縫いつけられたようだ。

「あれえー、どうしたのかなあ」

今までカレンに歓声を送っていたナギが首を傾げる。

「おっと舌を噛むなよ」

その隙にカレンが男を組み伏せ縄を口に噛ませ手首を縛った。暴れる男の鳩尾に拳を埋める。男は鈍い声を出したと思ったら崩れ落ちた。

「お疲れ様あ、カレン様」

「ああ、この男頼んだぞ」

ナギに男を預けると、男は気を失っているはずなのに浮いて直立している。

「はあい、カレン様はあ？」

「まだ見て回る。ナギも引き渡したら戻ってこい」

「はあい」

ナギは直立したままの男の服を引っ張りながら離れていった。

皇子暗殺事件（5）（後書き）

一気に投稿って自分すごいぜ！
疲れたけど・・・

皇子暗殺事件（6）

カレンがナギと別れ、広間へ戻り目を光らせていると一人の男が近づいてきた。内心カレンは毒づいたがそれを表に出さないように扇で顔を隠した。

「おや、やっと会えましたね。どこにいらっしゃったのですか、私のスカーレット」

「先程、あなたの声が聞こえたと思って庭園に下りたのですが風の悪戯だったようですわ」

「僕の姿を借りた君と二人きりになりたい妖精だったのかな」

「そのようです」

内心そんな訳あるか、と怒鳴りながらもスカーレットもといカレンは笑顔を絶やさずに努めた。

「妖精を惑わすなんて罪深いお人だ」

ハナブキはカレンの手を取り、大きく開いた背中にそっと手を置き分らない程度の愛撫を始める。

カレンは顔が引き攣り始め扇を持つ手がぶるぶると震えだす。

この男いつか、ぶちのめす！

何とか手をかわそうと身を捻るが一向に手が離れない、それどころか手の動きが大胆になってきた。

もう、我慢できない。貴婦人としてあるまじき行為をしようと拳を振り上げた。

「おや、これはハナブキ副隊長。それとそちらのご婦人はどなたかな？」

手を止め、話しかけてきた人物を見るとオディエン第1皇子だ。金髪の髪をオールバックにして華やかな婦人を連れて登場した。

「これはオディエン・・・」

「まあ言っな。これでもお忍びだ」

どこがだ、オディエンは王族特有の金髪を持っている。それなのにお忍びと言うには無理がある。今にも自分を狙ってくださいと言っているようなものだ。

胸に手を置いて頭を下げるハナブキの横でカレンは淑女の礼として片方のドレスの端を掴み前に出し、片足を一步下げながら頭を下げた。

笑みを絶やさないながらも皇子に苛立ちを隠せない。

なぜ自分よりも劣る馬鹿を守らなければならないのか、理解に苦しむ。自分たち宮廷5番隊は命をかけてまでこの国を守るうというのに、その一番上の奴が一人じやなにも出来ないただの木偶の坊だ

なんて釣り合いが合わない。

「お初にお目にかかりまして、私スカーレットと申します。宮廷5番隊に席を置きます2番隊隊長ヒョウリの姪でございます」

「おや、君はヒョウリ隊長の姪だったのか」

ハナブキが片眉を上げてカレンを見つめる。

「はい、今日の舞踏会にどうしても参加をしたくてヒョウリ叔父様に無理を言ってお願いをしたのですわ」

お恥ずかしい、と頬をうつすらと染めながら手をあてた。
その手をハナブキはとりながら唇を落とした。

「いえいえ、ヒョウリ隊長がいなければ僕とあなたの出逢いはなかったはずです。ヒョウリ隊長には感謝をしきれませんね」

「それよりハナブキ、あちらでお前の部下がお前を探していたぞ」

「はっ・・・ではスカーレット。必ずまたお会いしましょうね」

「ええ、叔父様に言って下さいな」

名残惜しそうなハナブキとは違いカレンは優雅に微笑んでみせた。

これから先、もう二度と会うことなんてないからな。

ハナブキを見送ってオディエンに向き合って別れを告げる。

「ではオディエン皇子、私はこれで」

「まあ待て」

背を向けようとしたカレンの細い腕を取る。

はい、と思ったときにはオディエンの腕の中にいた。

「・・・お戯れを」

「スカーレット・・・」

「お連れの方が待つていらっしやいますわ」

オディエンの横にいた着飾った婦人は今は泣きそうな顔をして二人を伺っている。

邪魔だ、視線で婦人を行かせると二人きりになってしまった。

「オディエン皇子」

「どうせすぐ俺が国王になる。その暁にはお前を側室に迎えてやつても良いぞ」

名誉なことだろう、そう顔が物語っていた。

「・・・」

今すぐこの短剣で首を掻ききつてやろうか。

それともお前の舌を引っこ抜いて二度と話せなくしてやろうか。

「それにしても見事な紅色だな」

カレンの心の内を知らないでオディエンはカレンの髪を一房とり、まじまじと見つめる。

「俺の宮廷護衛隊総隊長もスカーレットと呼ばれていたな」

「まあ、どのような方なんです？」

だれがお前のモノだ、そろそろ我慢の限界かもしれない。

「恐ろしく強いと聞く。まるで鬼神のようだ。まあ、俺には敵わないがな」

「まあ、そのスカーレット様と戦ったことがございますの？」

「いや、無いが。所詮、女だ。俺には敵わん」

先ほどからハナブキの相手をしていたこともあって、苛立ちが積もっている。

それにきてからのこの言葉だ。

もともと短気な性格なため我慢と言う言葉はカレンの頭の片隅にあるかもしれないが、それは極小だ。無いに等しい。自分はよくここまで耐えた、評価すべきだろう。

それにもともと皇子は7人もいる。一人位、愚王候補が消えるほうが世のためではないか。顔の血管が浮き上がりながら物騒なことを考え実行に移そうと庭園に誘おうとする。

口を開きかけた時、後ろから誰かに腕を引っ張られた。

皇子暗殺事件（7）

「なっ・・・」

全く今日は何て厄日なんだろう、また男の腕に抱かれながら溜め息ついた。

「おや、スカーレット。俺のところには来てくれないの」

「ヨキ！貴様何故ここにいる！？」

オデイエンが叫びながらカレンを奪い返そうと手を伸ばすがヨキはかわし、カレンの腕をとって踊っている人たちの中に加わっていた。

「・・・ヨキ皇子、髪はどうしたんです」

「これが本当のお忍びだ」

ヨキは金髪を茶髪に染め、身なりの良い格好をしていた。

「護衛の者をまた巻きましたね」

ヨキは第5皇子。国王になる望みは薄く本人もその意思がないため最小限の人数で良いと思ったが逆に仇となった。

「カレン、君が護衛してくれるんだったら俺は大人しくしてるつもりだったよ」

「別にあなたの命なんてどうでもいいんです、ただ死んだら私たちの信頼が落ちるだけです」

「冷たいな、こんなに綺麗に着飾ってきてくれたカレンを俺が逃すわけないよ」

そう、何故かヨキにはカレンの完璧な変装がいつもバレてしまう。若干、悔しいと思うがこの皇子は観察眼が鋭いと思っている。カレンは皇子たちの中で一番目をつけているのがこのヨキだ。

第6皇子ということで見落とされがちだが彼は本気になればこの国はマシになると思う、ただ本人にやる気がないだけで。

まあ、カレン自身この国などどうでもいいがもし国王になるとしたらこの皇子しかないと思っている。

「オディエンも馬鹿だよな。国王になりたければ、まずカレンを陥落させなきゃなれないというのに」

「さあ、どうですかね」

ターンを繰り返しながら態と足をピンヒールで踏みつけようとヨキの足を狙った。

だが、かるやかにかわされた。

ふむ、動きも悪くないし、頭も悪くない。国王になるには最高の逸材だ。彼が国民を思う気持ちを除くならば。

そして彼が第5皇子でなければ。

「私としては君以外にいないと思うのだがね」

「カレンが俺の物になったら考えるよ」

「じゃ、結構だ」

「そろそろ観念して欲しいな」

「面倒です」

態^{わざ}とらしい溜め息が聞こえた。だがヨキはあまり残念そうには思っていない顔だ。

華やかな場所におそろいの二人、この中で一番の輝きを見せていた。

自然と溜め息が周りからもれるが二人は意に介した様子がない。

二人とも分かっているのだ、自分たちが人を魅きつける力があると。

「私は後20年もしないでここを出て行くでしょう。その間にあなたが出来ることをするならば考えるかもしれません」

「ずるいな」

「あなたが言える立場ではありません」

それもそうだね、彼は口の端を上げた。

「分かった、じゃあ国王の勅書を奪ってきてよ」

「嫌だ」

死刑に値する行為をまるで今日の天気を尋ねるように簡単にヨキは述べたが即座にカレンは断った。

「さつきと言ってることが違う」

先ほどは頑張れと言っていたのに今は協力しないなんて。若干、彼の解釈が混じっていたがカレンは聞き流した。

「自分で出来るだろう」

「面倒なんだけど」

「影武者くらいなら貸してやろう」

だから自分で奪って来い、これが国王になるための第一歩だな。カレンも口の端をあげた。

「ケチだな」

「最高の褒め言葉だな」

曲が終わり二人は互いに礼をして離れた。
最後にカレンがそつと耳打ちをして。

その夜、謎の病により国王と第1皇子、第3皇子、第4皇子が息を引き取ったと噂が次の朝の城下に広がった。
そして国王には誰もが忘れていた第5皇子ヨキが就いたと広まった。

皇子暗殺事件（7）（後書き）

長かったあー

皇子暗殺事件 挿話

「お前、な、何をした」

王室に病弱の王の弱々しい声が響く。

「護衛の者！」

「すみませんね国王。俺に欲しい物が見つかってしまったんですよ」

ただの側室から生まれた皇子だと言うのに、報告によるといつもふらふらと動き回り政治にも何も興味を示さずに過ごしていると聞いているのに。

それなのに今自分の寝室にいる息子は何なんだ。小さな蠟燭の灯りに映る横顔に暗い影がさしている。

「なぜだ」

「どうせ、あんたのことだからオディエンに継承させるつもりだろう。さっさと勅書を出してくれ」

「ならぬ、次期国王はオディエンだ」

「あんな愚かな男に務まるはずがない。それに今頃、静かにあなた

のことを待ってますよ」

身体も自由に動かせない王が眠る上に乗った。

「俺は最初から最後まであなたを親だと思ったことはないよ」

驚愕に目を見開く王の頭を持ち、ある一点をつく。

人間はもろい、急所を突くだけで死んでしまう。

「つつ・・・」

悲鳴も出さずに王は一瞬目をこれでもかと開いた後、眠るように静かに瞳を閉じた。

「おい、勅書はあったか？」

天井に向かって呼びかけた。

「・・・見つかりませぬ」

ヨキは舌打ちをしながら部屋を後にした。

「次はオディエンの所か」

毒殺は不味い、何故なら宮廷護衛隊の信頼が落ちるし何より生き

残った奴が疑われる。

動くのは面倒だと思うが仕方ない。

ヨキは自分の部屋にある壁にある母の肖像画を外し、隠し通路へと入った。

道は最終的に外に繋がっているが途中の通路は皇子たちの部屋の近くに繋がっているのだ。

長年、使われていない部屋の鏡裏から静かに出て気配を窺う。
そのまま扉から顔を少し出した。

第1皇子、オディエンの部屋の前にやはり警備隊が2人いた。
だが、あそこにいるのはひよっこ共だ。抜け出して街で買ったゴムボールを自分とは反対の方に投げた。
ごん、ごごん、壁にぶつかり不規則な音を出しながら音は離れていく。

一人が離れた、その隙を見計らって扉の前にいた男に音も立てずに近づき鳩尾に拳をいれた。

「うつ」

そのまま倒れてくるのを受け止め扉に身体を傾け、立っているように見せかける。

そして中に入った。

オディエンは外にも聞こえそうな鼾をかいて寝ている、何も知らずに。

馬鹿な男だ。

何の悲しみも無いまま、眠りが深いオディオの急所を突く。何の言葉も発さずに鼾は止んだ。

もう一人が帰ってくる前にそこを離れた。後は勅書を探すだけだ。

あのジジイ、どこに隠したんだ。

自分の駒に探させているが姿、形も無いと言う。

ところがヨキが従わせている影とは違う黒ずくめの小さな人物が近づいてきた。歩き方で男と分かった。

殺気が無いのでヨキも剣に手をかけずに向き合った。

その男はそのままヨキに無言で手を出した。

手には丸くしてある紙が入っていた。それを手渡す。

ヨキは自分よりも小さな姿に少なからず驚いたが誰の差し金かすぐに分かった。

「礼を言っておいてくれ」

黒ずくめの男は小さく頷いてまだ明けていない空へ同化しながら

駆けて行った。

「全く、本当に俺を夢中にさせてくれる」

ヨキは握り締めた紙を開いて微笑んだ。

皇子暗殺事件 挿話（後書き）

彼の裏事情なんですネ

ヨキはやれば出来る子・・・？

常夜（１）

最近、城下を騒がせている義賊『常夜』。その首班は知られておらず、またその組織は固い絆で結ばれており秘密を漏らす者はいない。権力を不当に振るう貴族や民を苦しめる領主から金品を奪いとり、民の家に置いていく、また不正を暴いているため民からは大層好まれていた。

「いくら民の味方でも貴族たちは反発している。私も首謀者を見てみたいものだ。では、頼んだぞ」

「は、殿下の憂い事を減らせるよう必ずやご期待に応えましょう」

煌びやかに輝く椅子に座る現国王ヨキに宮廷５番隊総隊長であるカレンは最高礼をしながら答えた。

そして顔を上げ、部下と一緒に何の表情も浮かべずに部屋から出ていった。

「ナギ、クラリス、聞いたことがあるか？」

食卓の間、丸いテーブルに皆で座って食べながら2人に問うた。
一般的に貴族の屋敷などでの食事は細長いテーブルが普通だがカレンは食事は皆で囲んで食べた方が美味しいとカレンが丸くした。

「うーん、知らないなあ」

「私もあまり聞いたことが」

ふわふわの桃色の頭をして口調ものんびり答えるナギと白い髪を女性のように背中まで伸ばしかけてある眼鏡を中指で押しながらクラリスが答えた。

「まあ、最近聞く名前だしな」

「あら、カレン様。私は城下で聞きましたわ」

目尻に皺を寄せながらこの家の唯一の召使い、マリアが何故か2人に好戦的な視線を投げかけながらカレンに言った。

「どんな？」

「はい、やはり感謝ばかりでしたわ。まあ、当然ですわね。税金を無駄に搾取する領主の横領を暴いて更に領主の家から大量の豪華な物を持ち出して民に分けるんですから」

「ふむ、そう言えばナサとか言う領主が捕縛されたな」

カレンは食べる手を止めマリアとセバスチャンの5人の子供達を見る。

まだ10にも満たない年だが1人1人自分の性格が出てきた。一番上のアルトはセバスチャンの遺伝か、父親に似て無口だ。2番目はカイでこちらは元気いっぱいの子盛りで今も2杯目のお代わりをしている。3番目のサリーはマリア似で世話を焼きたがりの長女で4番目は泣き虫のソラ。5人目はまだ2歳なのに化粧が大好きで我が儘だが格好良い人が大好きなアカリ。カレンは我が子のように見守っていた。

「俺、義賊っぱいの見た」

シンプルな服を着て緑色の髪をしているアーサーがぼつりと言った。

「いつだ」

「多分、昨日の夜」

「ふむ、ちょうど領主の家に入った日だな。様子は？」

「黒装束、小さい、身軽、追ったが撒かれた」

悔しそうにアーサーが呟いた。

「・・・明日は足腰を鍛える」

「分かった」

「分かりました、でしょう」

マリアが笑いながらアーサーを見た。口元は笑っているのに目が恐ろしい。

「・・・分かりました」

「どうだ、マリアは怖いだろう」

カレンが悪戯っぽく笑ってマリアは手を頬に添え苦笑した。

「セバスも大変だな」

「いえ、慣れました」

「まあ、あなた！」

和やかな空気が広がる。

この時が一番温まり、生きていると実感できるのだ。

常夜（2）

賑やかな街並みに弱弱しい女の声がする。周りでは大きな声で客を集めているというのに、この声からはそんなのが窺えない。

「花はいかがですか？」

どこにでもいそうな村娘が野暮ったい服を着ながら籠に入った、少ししおれている可愛い花を行き交う人たちの中で小さい声をかけていた。だが見向きする人は一人としていない。

少女が溜め息をついた時、ふっと影がさした。

「野に咲くお嬢さん。その籠に入っている花を全部買おう」

一般的な茶髪だと言うのに目の前の男の髪は艶めいていて少女は自分の固い髪と見比べた。女よりも綺麗な髪を羨ましく思う。

「まあ、ありがとうございます」

「いえ、今付き合っているご婦人に花を贈るところだったのだよ」

それを聞くと少女は花を束ねて可愛くラッピングした。

「おやなんて優しいんだろ、僕はハナブキ。心根優しいレディ、君の名は？」

「そんな、レディじゃないです。私はサーニヤです」

サーニヤは自分の鼻の上にある雀斑そばかすを撫でながら恥ずかしげに答えた。

「僕の前じゃ、サーニヤはまるで慎み深い淑女だよ」

サーニヤのきつちりと縛ったおさげを手にとって弄ぶ。
初うづであるサーニヤは益々困惑した表情で真っ赤になった。

「あ、あの」

「真っ赤になるなんて可愛いね」

動揺するサーニヤにハナブキは細長い指を頬に触れた。そんなハナブキに為す術もなくサーニヤはされるがままにされている。

「あ、あの、もしかしてハナブキさんは宮廷護衛隊の方ですか？」

ハナブキの着ている服は少しハナブキ流に派手派手しく改良されていたが元は簡素な隊服だ。

それを見てサーニヤはハナブキに尋ねる。

「ああ、そうだよ」

話しながらサーニヤの低い鼻を優しく触れるハナブキはどこまでもふてぶてしい。

「君はいつもここに居るのかい？」

「ええ、たまに違う場所で売ってるけどここが一番多いです」

そうか、名残惜しそうに指が離れた。最後に耳を弄ぶのを忘れずにいったが。

「じゃあ、また会いにくるね、サーニヤ」

「待ってます。ハナブキ副隊長さん」

ハナブキは花を抱えながらサーニヤを後にした。

常夜（2）（後書き）

ちよつと短いですね。

常夜（3）

「お花はいりませんか？」

サーニヤは次の日も歩き回っていたがしおれた花を買う客は誰一人いない。

昨日は優しい人が買ってくれたのに今日は駄目だと肩を下ろす。

「おや、また会ったね」

聞こえた声に振り向くと昨日の男性、ハナブキが誰かを連れてこちらに近づいてきた。

「ハナブキさん！今日はお一人じゃないんですか？」

明るく笑いかけたサーニヤにハナブキは笑みを深め後ろにいた人物を紹介した。

「こちらはサーニヤ、昨日ここで会ってね。サーニヤ、これは僕の悪友、ヨザック」

「誰が悪友っすか。よろしく、サーニヤさん」

「サーニヤで充分です、ヨザックさん」

「俺もヨザックで構わないっすよ」

サーニヤとヨザックが互いに顔を見合わせて和やかに笑った。ほのぼのとした空気が広がる。

「こらヨザック、私のサーニヤをとるなよ」

サーニヤの手の甲に唇を落とし意識を向かせた。慣れていないのだろう、年頃の娘らしく赤くなる。

「ハナブキ副隊長、もうナンパ副隊長って呼びますよ」

呆れてヨザックは言葉を告げられない。
だがナンパ副隊長が気に入ったのか、サーニヤはお腹を抱えた。

「お前が余計なことを言うせいで笑われてしまったじゃないか」

「あ、ごめんなさい」

サーニヤは笑うのを止めて2人を見る。

「お二人はデートですか？」

「違っって！こんなナンパ副隊長に任務以外で会いたくない」

「おや、君の本音がよく分かった」

ハナブキはヨザックの頭をかき回し髪を乱した。こうして見ると

じゃれ合う子犬のようだ、それがまたサーニヤの笑いを誘う。

「じゃあ今日も任務なんですか」

「ほらみる、君のせいで台無しじゃないか」

「あら、何の任務かしら？」

「これは内密なんですがね」

人差し指をサーニヤの唇に置いて、秘密だよと囁く。

「内密じゃ話しちゃ駄目じゃないすか」

そんなヨザックを無視してサーニヤを甘くとりけるように見つめながら人差し指を動かして唇をなぞった。

「サーニヤ、君は『常夜』のことを知らないかい？」

だがサーニヤはきよとした顔をする。

「『常夜』ですか？」

「ああ、そうだよ」

「申し訳ないですけど、私分かりません。ただ民に優しい人たちとしか」

そうか、とハナブキは呟いた。

「ありがとう。そうだ、今日も花を頂こう」

「ありがとうございます」

ハナブキは代金を払いヨザックに何度も注意を受けるまでそこを離れなかった。

だがやっと離れた二人は先ほどとは違う表情をつくる。

「ハナブキ副隊長」

「ああ、分かっている。彼女は」

『常夜』を知っている。

彼女はまだ知られていない『常夜』の情報を知っている。個人だと思われていた『常夜』なのにサーニヤは『人たち』と言った。

残念に思うが調べるしかない。

「残念だな」

しおれた花を手のひらで回しながらヨザックに聞こえない程の声で呟いた。

常夜（4）

今日はどんよりと曇った空、商売をする人はあまりいなかったが一人の少女は今日も街を歩く。いつもよりも夜が更けるのが早く人々はさつさと店じまいをする。

「花はいかがですか？」

しおれた花を籠につめて夜が更けた街を歩く。

「今日も売れないのかしら」

俯きながら困った顔をした。

この前売れた時から数えてもう一週間近くになる。

「おら、どこ見てんだ」

「わっ、すみません」

俯いていたためか、柄の悪い人たちにぶつかってしまった。

「おい、嬢ちゃん。ぶつかっておいて御免で済む訳がないだろ」

「すみません、すみません」

何度も謝るが男はか細い腕を掴んで下卑た笑いを顔に浮かばせながら顔を近づけた。自分より大きい顔が近づいて身を引いた。

「嬢ちゃん、可愛い顔してんじゃねえか。どうだ、一晩相手してくれたら許してやってもいいぜ」

「や、やだ」

拒否して無我夢中で手足をばたつかせるが男は屈強なためびくともしない。

「大人しくしろ」

口を抑えて裏路地へ連れ込んだ。声を出そうとするが口を塞がれくぐもった声しか出せない。

「ふ、むー！」

太い腕に噛みついて逃げ出そうとしたが男に取り押さえられた。

「このあまぁ！」

殴ろうと振りかぶった。反射的に目を瞑る、だがいくら待っても拳がサーニヤに届くことは無かった。

そろりと瞼を開けてみると一人の男が立って拳を受け止めていた。

「おい、あんた。女に暴力なんて振るうもんじゃないだろ」

そして暴漢の太い腕を捻り上げた。相手より細く小さい姿なのに

力負けしていない。

「いででででっ！」

みしつと骨が軋む音がした。

「今日は退いてやりゃあ」

負け犬らしく言葉を残して腕を押さえながら大通りへと出て行った。

「大丈夫か？」

「ありがとうございます」

差し出された手を取り立ち上がった。その先を見るとサーニヤと同じくらいの歳か、それより下の青年だった。

「怪我はないかな」

「はい、大丈夫です」

まだ震える腕を押さえながらサーニヤは自身に怪我が無いか見た。

「って、足を擦りむいてるじゃないか」

「え、あ、本当。いつ出来たのかしら」

多分、男に抵抗した時だろう。どこかにぶつかったのも分からないが結構、血が出てサーニヤの

穴が開いている靴を染めている。

「きなよ、手当てしてあげる」

男はサーニヤの手を引きながら自分の家へと遠慮するサーニヤを無理矢理連れて行った。

「あの、ここは」

「ん、遠慮しないで。僕たちが住んでる処だから」

そう行つて連れられてきたのは街外れの廃墟だった。

もう何十年も人が住んでいないのか、あちこちに埃が溜まっており空気が濁っている。

「あの、言い遅れましたが助けてくれてありがとうございます」

「いいよ、はい、できた」

手際が良いのか、足に巻かれた包帯は少し動いても取れそうになり。

「本当にありがとうございました」

「いいって。送ってくよ、家どこ？」

途端にサーニヤは顔を曇らせる。

「私、家が無いんです」

「なんで」

「親に捨てられて、夜も寝る処を転々としてて」

ぎゅっと染み汚れたスカートを掴んで目に涙を湛える。

「ちょ、泣くなよ。泣かれると困る」

「すみません。だからいいんです。今日も雨風を凌げる場所で寝ますから」

涙を拭って笑顔で青年を見つめた。

「あー、もう」

頭をガシガシしたと思ったらサーニヤを見てぶっきらぼうに言った。

「いいよ、ここに泊まりなよ」

「そんな、そこまでしてもらうわけには」

「女の子が外で泊まる方が危ないっつの」

そう言うとはいと薄い毛布をサーニヤに渡して自分も汚れた毛布にくるまって二人でくっついて寝た。

年頃の女として大丈夫かと思ったが既に寝ている男を見て自分も寒さに震えながら毛布に包まった。

常夜（5）

寒さとまどろみの中、こちらが寝ているのにも関わらず大きな声で起こされた。最悪の目覚めとなった。サーニヤは驚いて飛び起きた。

ぼさぼさの働かない頭で声の主を探す。

「おい、ヨル起きろ」

「う、んー」

朝が弱いのかヨルはまだ夢の中だがサーニヤは朝が早いたため次第に覚醒した。

「誰？」

「お前こそ誰だ？」

屈強な男はナイフを取り出しサーニヤの首に押しつけた。
ナイフの冷たさにサーニヤは完全に目を覚ました。

「つつ・・・」

叫びたいが声を出したら殺される、サーニヤは懸命にも悲鳴を押し殺して震える手を押さえた。

「何だ、女か」

抵抗もできないサーニヤに男は警戒を解き、ナイフをポケットにしまった。

そしてまだ寝ているヨルを足蹴にした。

大きな音を立ててヨルは壊れたソファから落下した。

「つてー！あれ、セミル」

セミルと呼ばれた男はヨルを組み敷き顎でサーニヤをしゃくる。

「ヨル、あれほど動物は拾うなと言っただろう」

もしかして、私、動物扱いか、少し悲しくなりながらもサーニヤは二人を見つめる。

「だってさー、あの子襲われそうになってたんだよ」

「そのまま見捨てておけばよかったものを」

本人を前にして言うことではないが助けてもらった手前、サーニヤは何も言えなかった。

ただセミルという男には顔を顰めたが。

「で、お嬢さん、とつとと出て行ってくれないか」

「おい、セミル。そんなじゃサーニヤを一人にさせるのか」

「お前は馬鹿か。こんな女一人に構ってたら捨て子を見たら全員拾うのか。俺たちにそいつらを養う財力も力も無いってのに」

そう言われるとヨルも黙った。

確かにこんな処に住んでいる自分が相手を養うなど出来る訳がない。

セミルが言っていることは正しい、だがこんな年もいかぬ女の子にまたあの夜のような怖い思いをさせるべきではないと思うが反論できない。

黙るヨルにセミルは頭をかき、分かったよと諦めたようにぶっくらぼつに言った。

「女、何ができる？」

「何って」

「暗殺、密偵、情報収集、さあ選べ」

選択しが三つしかない。しかもどれも一般の人が出来ることではない。

しばらく逡巡した後、サーニヤは言った。

「・・・料理ならできます」

「ああ！？料理だあ？んなもん、誰だって出来るわ」

「し、ごめんなさい」

気弱なサーニヤはビクリとしてヨルの後ろに隠れる。

「セミル、苛めないでよ」

「ちっ、別に苛めちゃいねーよ」

だが完全に少女は怯えきっている。

「も、もしかしたら情報収集や伝言と届けることなら出来る、かもしれません」

最後の方は尻つぼみとなって全く聞こえなかったがヨルは笑顔になった。

「まあ、いいじゃん。人も少ないんだし」

「ちっ、これだからお子様はこまるぜ」

「すみません」

気弱な少女は瞳にうつすらと涙を溜めながら、謝り続けた。

「それに大丈夫だよ。彼女、武術の基本すら知らない女の子だし気配にも敏感じゃないと思うし」

それは知っている、先ほど組み伏せた時に彼女の手のひらを見させてもらった。

サーニヤの手は荒れていて節ばっていたが剣など握ったことのない手だった。

それに気弱だが結構、度胸が据わっていると思う。

俺にナイフをつきつけられた時、暴れなかった。

もし暴れていたら間違いなく頸動脈を切っていただろう。

ふむ、数合わせにしては、まあ悪くない。

そう思っ**て**びくびくしている茶髪の女をじつと見る。

どこにでもいるような女は少し化粧をすれば多少は見れる顔になるだろう、それに女の仲間も少ない。物覚えは悪いかもしれないが
駄れば問題ないだろう。

常夜(5)(後書き)

ちんぴらかっ！

でも最近、ちんぴらっていう種族は見えない気がします
虹乃がひっきーなだけかもしれないが

常夜（6）

サーニヤが震える声でセミルに報告をする。

まだセミルと目を合わせられないサーニヤはセミルの太い首を見て話す。

自身の腰のような太さのような首だ。腕もサーニヤの三倍はあるのではないかと常々思っている。

「え、えとカレン伯爵は成り上がり貴族ですが民にも優しく領地の民が言うには『皆、よくしてくれる。税は上がらないし食物改良にも手伝ってくれる』と。心配事と聞けば『カレン様が怪我をしないか。あとはカレン家の争奪戦』だそうです」

「争奪戦？」

「カレン家の人たちは端正な顔を持っているけれど結婚してないのに未婚の民たちが狙ってるそうです」

「ふむ、問題ないか」

セミルは少し顎に手をあて考えたが、次の報告を言うように促した。

「えと、次はアロン男爵ですが・・・」

「ちょっと待って」

「なんだ、ヨル」

今まで壊れたソファに身を預けて報告を聞いていたヨルだったが手を上げてこちらへと顔を向けた。

ヨルが動いたせいで、溜まっていた埃が宙へと舞う。

「カレン伯爵って宮廷護衛隊の総隊長でしょ。どれだけ強いのかな」

「さ、さあ」

「いい加減にしろ。お前の暇つぶしに付き合う程、俺たちは暇じゃない」

以前も同じことがあったのか、セミルは苛立たしげにヨルを見て舌打ちをする。

そんなヨルを見てサーニヤが肩を震わせる。
悪循環だ。

「ねえ、セミル」

甘えた声を出したヨルにこれ以上相手をして無駄だと分かったのだろう、手を振り勝手にしろと言った。

「だが、今回は見るだけにしろ」

「何で」

「魔法使いがいるだろう、何だっけネギとかなんとか」

「ナギです」

今までもろおろしていたサーニヤが口を挟んだためセミルは冷たい一瞥をサーニヤにくれた。これは、お前は口を挟むなオーラだ。サーニヤは心得たように目を逸らした。そして震えだした。

「わかったよ、見るだけ。手は出さない」

仕方なしに降参したように両手を上げ、また薄汚れたソファーへと転がり小さな寝息をかき始めた。だがヨルが寝る前に舌を出したのをサーニヤの報告を聞いていたセミルは見えていなかった。

常夜（7）

セミルからお許しをもらったためヨルは一人、闇に乗じて民家の家を音もたてずに走っていた。

目指すはカレン家、広大な敷地に大きな屋敷が見えた。カレン家は前国王に与えられた地位と屋敷であるため無駄に大きい。だが豪華な外見の屋敷とは打って変わって庭は綺麗に薔薇の花が咲いており屋敷の雰囲気とは似合わないものだった。

ヨルは屋敷の周りをぐるりと回る。貴族の家はどこも造りが似たようなものだ。ヨルは地下への扉を見つけると鍵を何てことも無いように開けた。だが扉を音を立てずに引いた瞬間、違和感を感じて中をゆっくり覗く。すると扉の取っ手に紐がついていて、その先をたどると天井に続く紐の先に鈴がついていた。

この屋敷、やるな。

心の中で感心し久しぶりに体中が騒ぐ。

音が鳴らないよう十二分に注意しながら紐を切った。

地下は厨房に続いていたらしく、広い部屋に竈や鍋などあったが、どれも綺麗に並べてあった。余程、メイドたちの躰がなっているようである。

さらに廊下へと出ようと扉をゆっくり開け何も無いことを確認して廊下へと出た。

歩を進めて人の気配がするところまで行く。

奥に複数の寝息が聞こえた。呼吸の浅さから子供だとわかる。だが普段の貴族の召使や執事は屋根裏部屋で過ごしているはずだと思っただが成り上がり貴族だったと思い、子供がいる部屋は通り過ぎ、主人の部屋があつてあろう二階へと階段を上る。

階段を上り終え、廊下を進もうとしたがふいに身体を強張らせ飛びのいた。今まで立っていた場所にナイフが刺さった。

「つつ、誰？」

「あなたこそ誰です？あなたのような下賤の者が無断で入っている屋敷ではありません」

暗闇から姿を現したのはメイド服に身を包んだ女性、声からして30代のような年齢より若く見える。

ヨルは驚きながら距離を取る。もともと争うために来たのではない。ただの下見だ。

「落ち着いて、ただ入っただけじゃないか」

「そのままカレン様の寝室に入ろうとしたら、太陽を拝めないことになってましたよ」

じりじりと距離を取ろうとするメイドに苦笑しながらおどける。メイドなのに戦闘に慣れている、全く恐ろしい屋敷だ。

「じゃあ、このまま帰ったらいいかな」

「おや、逃げるんですか？『常夜』のくせに」

彼女の洞察力に驚く。名乗りを上げていないのに気付くとはさすがカレン家のメイドというところか。

「ばれてた？」

「当たり前でしょう。その身のこなし、カレン様の屋敷に入るという図々しさ」

このメイド一人だけならばかわせるが早々に逃げた方が良いみたいだ。

「4対1はきついよ」

「・・・気配に敏感ですね。まるで犬のよう」

明らかな挑発だが乗って動いてはいけない。動いたら最後、自分の胴体とお別れになる。

「あなた、アーサー、アルト」

その言葉に三人が姿を現す。セバスチャンはヨルの背後に、アーサーはヨルの斜め後ろに、アルトはマリアの斜め前に前路と後路をふさぐ。

「さすが総隊長の仕込みだけあって洗練されてる」

「お褒めに預かり光栄ですわ」

代表してマリアが答える。だが嬉しそうな表情は全く見せない、

よく躑んでいる。

「でも俺は何もしない。ただ来ただけ」

「人の屋敷に入って今更命乞いですか」

「だって怪我したくないし」

「・・・いいでしょう。アーサー、アルト」

その言葉にセバスチャンが身を引いてマリアの下へ下がった。
だがアルトとアーサーはヨルと向かい合う。

「二人共、今は11と12です。二人から逃げれたなら追いませんわ」

元々無表情だったアルトはさらに表情を削ぎ落とし、アーサーもぐつとナイフに力を入れる。

「いくよ」

自分より下の相手にヨルも剣を抜く。
年下だと思つて舐めてはいけない。

ヨルも剣を構えた。

「おつと、おお」

交互に繰り出される攻撃に内心舌を巻く。
やはり筋肉もついていないため力の無い攻撃となつてしまふ。だ

が若さなりの速さがある。しかも協力して自分たちの隙を補っている。将来が有望だ。

これはなかなか辛いものだ。退散するのが得策だな。

ヨルはアーサーが短剣を振り上げた時に出来た隙を見て脇腹に蹴りを入れる。

「ぐっ・・・！」

その声に反応してアルトの注意が一瞬アーサーに逸れた。その隙を見計らってヨルは後ろへと跳躍する。

「待て！」

まだ声変わりしていない声と一緒に短剣が飛んできた。

「おっと、では皆さん、またお会いできることを祈って」

ヨルは短剣を弾き、振り返ることなく窓を突き破って外へと出た。顔に久しぶりの笑みと興奮に身を踊らせながら闇に乗じた。

常夜（7）（後書き）

ちよつと休憩しますか。
でも今日中にまた投稿しまふ。

常夜（8）

サーニヤの情報収集が板についたせいか、それともヨルに拾われて二ヶ月たったせいかサーニヤは彼らのアジトに連れて行かれた。サーニヤも薄々、セミルたちは個人で行動をしてはいないと思っていたがまさか表では宿屋をやり裏では義賊だとは思わなかったとヨルに呟く。

「そうだろ、サーニヤをここに連れてきたってことは信頼の証さ。俺たちは世を嘆く民のために戦っているんだよ」

「すばらしいですね」

だが、あまり売れていない宿屋で資金の調達や情報は無理に思える。

「あの、ここが本当にアジトなのですか？」

「そうだって」

「でも、失礼ですが、こんなところで情報を集めたりできるのですか？」

「ああ、情報は貴族に勤めてる奴らが聞いてくるし資金は貴族から

貰える」

「貴族？」

「ああ、・・・って、おお！これは秘密だった。絶対、今のセミルに言うなよ。言ったら殺されるからな」

いきなり大声を出したヨルに驚いたが、サーニヤの肩に痛いほど力を込めて顔を近づけながら真剣な顔に押され、サーニヤは頷くしかなかった。

サーニヤは街で情報集めだったが今日からここで働くことになる。

下働きから少し上になったようだ。

だが、こんな宿屋で何をしたらいいのか。大した情報も集められないだろう。

「私はここで何をすればいいんですか？」

「礼儀作法を身につければいいんだよ」

「礼儀作法？」

「ああ、ここで一、二年ほど身につけて次はどっかの貴族にもぐりこんでもらうの」

なるほど、これは次に進むための計画のためか。
だが一年もかかるなど、待ってられない。

「えと、私、生まれは中級貴族でしたのである程度の作法でしたら大丈夫です」

「貴族！」

「と言っても落ちぶれてしたが。私の父の代で没落してしまったせいで家族がばらばらになっただんです」

サーニヤは目を伏せながら思い出したように微笑む。あの頃は楽しかったなと呟いた。

「なんか、ごめん」

「いえ、もう過ぎたことですから」

努めて明るく言うサーニヤに申し訳なく思っ頭を掻く。女の子を丁寧に対うのには慣れていないのだ。

「じゃあ、早く貴族の処に潜りこめるな」

「そうですね、頑張ります」

ここでは宿屋として通常業務をする傍らでサーニヤは情報を仕入れた時の仲間への伝え方、もしばれた時のかわし方、身の守り方、また誘惑の仕方を教わった。

「あの、誘惑は必要なのですか」

「当たり前だ。もしかしてお前、処女か」

「なっ！！」

セミルに指摘され真っ赤になる。

それを見たセミルは何とも言えない顔をした。

「今のうちに好きな奴にでも抱いてもらえ。もしいなかったら俺が相手してやるよ。貴族のでっぴらした奴らよりマシだろ」

わなわなと震えていたサーニヤだったがセミルの発言により口を開いて固まった。顔から火が出そうな勢いだ。

「け、結構です！！」

情報収集のためには寝ることを教えられた。先にいたサーニヤと同じ年の先輩たちは既にセミルやヨキ、またはここに泊った旅人と事を終えておりサーニヤは本気でどうしようか悩んだ。

結局、誘惑の仕方を先輩たちから教わったり本を借りたりして勉強した。

なぜ色事にこれほどまで張りきらなければならぬか後悔が混じったが、一番情報を得やすいのはベッドの上だから仕方がない。

誘惑を成功させないと貴族の家へ行かせてもらえない。

そのためサーニヤは泊った旅人の部屋へと行った。

相手は幸いか背まで髪を伸ばした青年で器量が良かった。知性が滲み出ていたので誘惑できるか自信は無かったが所詮は男、簡単に落ちた。

だが誘惑が成功したのを見届けるため隠れていた先輩に見られながらの行為というのは恐ろしく萎えた。

常夜（8）（後書き）

疲れたのでまた次回、投稿します・
体力が無いのです、えっへん

常夜（9）

本来は数年、侍女の勉強をしなくてはならないがサーニャは礼儀作法、身のこなしが教えられた以上のことをしたためほんの半年で済んだ。

「本来はどんな奴でも数年たたないと配置させないが人数不足だ。奉公させに行かせる」

「ありがとうございます。必ずご期待に添えられるよう頑張ります」

前まではセミルの目を見ることが出来なかったが今ではもうしっかりと目を見て会話するほどが出来るまで成長した。

「期待しているぞ」

今ではすっかり信頼を通り越して家族意識になっている。

「ですが私は誰の紹介で奉公に行くのでしょうか」

貴族でも無いサーニヤが行くには必ずしっかりと身分が示さなくてはいけない。

「ソラーミジエ公爵の紹介だ」

「え、あんなに有名な貴族が後ろ盾でしたの」

ソラーミジユ公爵は前国王の叔父にあたる大貴族だ。ソラーミジユ公爵は慈善活動をしていて幾つもの孤児院や資金活動もしている。そんな人が裏では『常夜』の後ろ盾だったとは。

確かにこんな大掛かりな組織をまとめるには有名な貴族がいると思っていたがソラーミジユ公爵だったなんて。慈善活動の裏にはこんなものがあつたとは、ね。

「それで私はどこの屋敷に奉公に行けばいいんです？」

「カレン伯爵の処だ。丁度、話があがったそうだ。あそこは手強いだろう、だからまずは信頼を勝ち取れ。それまでは連絡するな」

「私にできますか？私よりもっと適任者がいるかと」

不安なサーニヤ、まさかいきなり伯爵の屋敷に奉公とは思ってもしなかったのだらう不安げな表情を浮かべている。

「本来ならな、ベテランを行かせるべきだが伯爵は宮廷護衛隊の総隊長だ。気配に敏感だらう、お前はまだ慣れていないだらうからへまをしる」

「へ、へまをしていいんですか」

「公爵の紹介だからあまり大きな問題は起こすな。けれど害が無いとアピールしろ」

難しい注文だ。へまをしながら無害アピールなんて、上手くいくのだろうか。

「不安か」

「当たり前です」

セミルはにやつとニヒルな笑みを浮かべながらサーニヤの頭をぐしゃぐしゃかき混ぜる。

「ちょ、ちょっと」

最近セミルは表情が豊かになったと思う。常に深い皺を刻んでいたが最近はやかな顔だ。

誰かが笑わせているからだ。

サーニヤがその役を一役買っているかもしれない。

サーニヤは毎日必ず一つは失敗をする。

この前はアルツパツツという高級食材を水につけて全て駄目にした。サーニヤが言うには知らない材料だったため、とりあえず水で洗っただけだが全て溶けてしまったため厨房出入り禁止を言い渡されたのだ。

「うー、失敗しませんように」

セミルの前で手を合わせて拝む。手をこすり合わせながら本格的に祈っている。

「おい、俺は神でも無いんだからな」

セミルは呆れたように言った。

「当たり前です。この世に神などいません」

「そりゃ、そうだな」

常夜（10）

サーニヤがカレン伯爵の元に行って早1ヶ月、各貴族へ忍び込ませていた諜報員たちとの連絡が途切れていた。

「どういうことだ！」

セミルが宿屋で声を荒上げるもの答えてくれる人はいない。
唯一いるヨルは長椅子に寝ころびながら、うたた寝をしていた。

「もしかしてばれちゃったのかな？」

ヨルが目を閉じながら最悪の可能性を伝える。
セミルもそれは頭の中に入れていたが、まさか全員が知れてしまったなどとは肯定したくない。

後ろ盾はしっかりしすぎているし完璧な身のこなしの者しか入っていない。また彼らは裏切らないし口を割ることはまず、ない。

それなのに連絡がいかないとなると、やはり何かがあったようだ。

「セミル、王宮の奴らから手紙だ」

もちろん、王宮にも忍び込ませている。紙を広げてみると焦ったような字で天気が悪いだとか、洗濯物の乾きが悪いなど日常会話が書いてある。

しかしこれはカモフラージュであり、天気が悪いとは状況が悪いこと、また乾きが悪いとは捕まった仲間がいるということだ。

他にも文を読んでいると、どうやら宮廷5番隊が絡んでいるらしい。

ただののほほんとした連中だと思っていたが、どうやら切れ者の中にはいるらしい。1番隊である隠密集団が次々と捕縛したようだ。

しかも奴らは自害が出来ないようにされているらしい。

こうなるとソーラミジユ公爵にも迷惑がかかってしまう、俺たちが捨て子を拾ってくれたあの方に。

また声がかかり、今度は仲間がサーニヤからの初めての文を持ってきた。

カレン家に仲間が数人連れられ、カレンの巧みな尋問で情報が漏れている、とのことだった。またソーミジユ公爵に目をつけていることも書かれてあった。厳重な警備のため仲間の安否が確認できないようだ。

「行こう」

無言であつたヨルがぼつりと、だがしつかりとした声で呟いた。

「何を言っている！俺たちが行ったら奴らの二の舞だ」

「俺たちが仲間を殺さないと公爵に迷惑がかかる」

その言葉にやっとセミルも落ち着きを取り戻した。
直ぐにサーニヤに文を出す。

満月の夜、月が雲に隠れた時にお会いしましょう。

常夜（11）

月が雲に隠れ、街が静まり返り野犬の遠吠えしか聞こえなくなつた深夜に多くの足音が地を蹴る。しかし音は全くせず、服がこすれる微かな音しか聞こえない。

カレン家の屋敷が見えたところで二方に別れた。
裏口と正面からだ。裏口に回るのはセミルと数人の精鋭部隊、正面に行くのは残りではほぼ全員というほどの仲間だ。

なんとしてでも秘密は守られなければいけない。

セミルが裏口に回ろうとするが一周ぐるりと回ってしまった。おかしいと思い、もう一度向かうとやはり正面に戻ってしまう。

これは魔法だ、どうやらカレン家の人々は正面からの訪問を期待しているらしい。

その期待に応えるしかなかったセミルたちは正面に行き、全員で正面から突破することにした。

門の中にと足を踏み出した時、明りが一斉にともった。眩しさに目を細めるとうつすらと人影が見えた。

「誰だ！」

「誰とは心外ですわ。ここはカレン様の屋敷、でしたらおわかりでしょう『常夜』の皆さん」

目が慣れたらしく、前を見ると使用人たちが勢ぞろいしている。メイドに執事、国一番の医者に魔法使いもだ。さらには子供までいる。

だがたったの7人だ。こちらにはその何十倍もいる、だが桃色の

ふわふわした髪魔法使いが邪魔だと目配せし合う。

「おや、総隊長にまで名が知られているとは光栄だな。だがその隊長殿はどうしたんだ」

「あなたの仲間から後ろ盾を聞き出しているために地下に言うつたらどうなさいます？」

会話で注意を逸らそうとするがなかなか敵は手ごわい。メイドの女は逆にこちらを煽りたて冷静さを欠くようにしている。

「ええ、違うよお。カレン様は今、二階の寝室で寝てるよお」

「はて、先ほど厨房にいたように思ったのですが」

白髪の青年が銀の縁の眼鏡を直しながら、頭を傾げている魔法使いと話している。そこに先ほどのメイドの声が混じる。

「ナギ、クラリス、世間話したいならカレン様のところに行ってくださいなさい」

途端にナギとクラリスが黙る。お客様をお待たせしてカレン様のところに行くに確実にお怒りの言葉が待っている。

仕方がないので、やっと侵入者たちに顔を向けたがやる気が全くと言っていいほど見られない。

「早く終わらせようよお」

「だったら魔法でもなんでもいいから使えばいかがですか？」

クラリスがまた眼鏡を直しながらナギに呆れた声で言う。

「あ、そっかあ」

まるで今日の天気は晴れですね、のようにあつさりしすぎている。これでは毒気が抜かれてしまいそうだが魔法の言葉に身を固くして相手の出方を待つ。

んじゃ、いくよーとやる気の無い声と一緒に詠唱が始まる。

「闇よりもなお昏き存在 暗黒よりもなお深い存在 我ここに汝に願う 我ここに汝に誓う 我が前に立ち塞がりし全ての愚かなる者に 我と汝が等しく滅びを与えんことを」

いつもの話し方とは違い、凜とした声で詠唱すると足元に魔法陣ができて、そこから骸骨が出てきた。数は数十体、まるで生きているかのように動いてセシル達に向かってくる。軋む骨の音とともにこちらへとゆっくり歩みよってくる。

その禍々しさに仲間たちが息を飲む。死者を冒瀉しているとしたか思えない呪文だ。

だが何故かカレン家からも悲鳴が上がる。

「きもつ」

「最悪ですわ」

「・・・」

「ええ！？僕、頑張って詠唱したのにい。詠唱って面倒だからいつもしないのにカレン様のために頑張ったのにさあ、酷いよお」

緊張感の欠片もない声が飛び交う。そのせいでセミルは少し冷静さを取り戻した。

「臆するな、たかが骸骨。俺たちより劣る。切り込め！」

「そんなことないよお、だって彼ら強いよ」

自ら先頭を切るセミルだがナギの言葉を実感させられた。剣で切りつけるのに倒れない、むしろ動きが増している。

セミルたち『常夜』は苦戦を強いられた。

常夜（11）（後書き）

よく漫画とかって詠唱とか技名を恥ずかしくもなく言えるのでしょう
虹乃は「燃えろ、ファイアー」とか言うのにも苦戦を強いられると
言うのに・・・

だから、インターネットから詠唱部分は抜擢しちゃいました
いやいや、自分で格好いいのなんて浮かびませんでしたから

常夜（12）

戦いが火蓋を切って落とされた――

カレン家のあちこちで悲鳴が上がる、だがそれも『常夜』の連中ばかりだ。

訓練された仲間内だというのに全く歯がたたない、カレン家たちの連中はさらに上をいくようだ。魔法使いはともかく、医者だというのに暗器の小刀を目にも止まらぬ速さで投げている。メイドは身の丈に合った剣を軽々扱っているし、執事はどこに隠し持っていたのか次々と武器を取り出しては切りつけている。さらには黒装束の子供たちも2人で確実に1人1人敵を倒している。

「反則だぜ」

セミルは骸骨を操っているナギの前まで跳躍し剣を横に払う。

「わおっ」

髪を掠めたただだったが注意を逸らしたことにより骸骨共の動きが少し鈍った。そのまま距離を縮めようとするが目の前に骸骨が出てきた。

「ちっ！」

骨を叩き割るがまだ動いて元の形を形成しようとする。本当に気味が悪いもんだ、セミルはもう一度切り刻みナギを倒そうと構えるがナギの前には何重にも骸骨が塞がって主を守ろうとする。

「これじゃあキリが無いぜ」

ところが戦っていた骸骨たちが急に動きを止めた。

骸骨の先のナギを見ると、女によって首にナイフを突き付けられていて止まっていた。

「サーニャー！」

セミルは安堵の息をついた。それに合わせて皆が動きを止めたて睨みあっている状態だったが意識は2人に向いている。

「動くな」

サーニヤはぐつとナイフに力を入れて、あと少しで血が出そうになる一歩前までナイフを肉に埋めた。

どうやら形勢逆転だとセミルは辺りを見回す。

大分やられたようだ、残りは数十人となってしまった。また一か
らやり直さないと。だがその犠牲で公爵様の秘密は守られる。

だが突然の沈黙が聞きなれた声によって破られる。いつもは飄々とした態度なのに今は焦っているようだ。

「セミル、逃げろっ！！」

視線が屋敷の入り口に集まった。

ヨルだ。

ヨルには自分たちが戦っている間に仲間の抹殺に行ってもらって

いたがどうしたのだろうか、焦った表情で魔法使いを見ている。

「早く逃げるんだ」

「おい、どうしたヨル？」

何の説明も無しに逃げろでは伝わらない、そのため仲間も混乱している。

だがヨルは無表情で魔法使いとサーニヤの方を見ている。その視線を浴びたサーニヤが困惑した様子でヨルを見るがナイフを握った手の力は緩めない。

「どうかしたの？ヨルさん」

サーニヤは説明を求めるが何も言わないヨルを見てセミルに説明を求める。だがセミルもヨルの考えが分からないため何も言うことができない。

逆にカレン家の使用人たちは冷静に見ている。

仲間が人質に取られ、今すぐにでも首の血管を切られようとして

いるのだ。

「・・・お芝居はもう止めたらどうだい。サーニヤ、いや、宮廷護衛隊総隊長カレン」

ヨルが睨むようにサーニヤを見つめた。

常夜（12）（後書き）

こつ「ふっふ、ばれては仕方ない。お察しの通り、私は・・・だ」
っていうシーンが大好き

常夜（13）

今、ヨルは何と言った――

その意味が分からずにセミルはサーニヤをただ見つめる。サーニヤも驚いた表情をしている、当たり前だ。戦いの最中に敵の、しかも敵の総隊長の名前を言われるんだから。

「何を言っているんですか」

今はそれどころでは無いと言うように叱責する。

だがヨルは睨んだまま動こうとしない、それどころか神経を尖らせていつ攻撃の体勢に入ろうかと構えている。

「もう止めたら？僕は地下室にいた仲間から聞いて知ってるよ」

「・・・」

「おいヨル、お前いい加減にしろ。今はそんなこと言ってる場合じゃない」

ヨルが言っていることが本当だったとしたら今までサーニヤと過ごしてきた時間は何だったのだろうか。覚えはいいのに毎日一回はドジをするサーニヤ、どんな時も笑顔だったサーニヤ、これらは偽物だったということか。

だがサーニヤには出会った当初には剣胼^{たこ}胝など無かったはずだ。

訓練するにつれ出来ていったのは複数あるが。

仲間たちも皆、一様に信じられないといった表情だ。視線がサーニヤに集まる。

「・・・あーあ、ばれちゃいました？」

「つつ・・・！」

ナギからナイフをはずして服の袖で顔をこする。

そこには目立った雀斑そはかすがあつたはずなのに、その顔にはシミ一つない整った顔が出てきた。サーニヤのどこにでもいるような顔ではなくて貴族そのものの顔だ。

「カレン様、お顔が赤くなつてしまいます。こちらをお使いください

い」

メイドが上質なハンカチを濡らして渡す。面倒くさそうに拭いていたが、その布の下から白い肌が出てくる。

垂れ目だったはずの眼はつり上がっていてその顔に合っている。

「全く、一年もあんなところにいるとはね。肩が凝る」

「カレン様が行ってくるって言ったじゃないですかあ」

「こんなに面倒だとは思っていなかったんだ」

口調もがらりと変わり、雰囲気そのものが違う。

サーニヤ、いやカレンはナギが持っていた剣をはぎ取ると切っ先をヨルに向けた。

「さてお前が何度も剣を交えたいと思っていた相手が目の前にいるのだが」

「おい、サーニヤ、嘘だろ」

セミルは信じられなくて声が震える。心を通じ合わせて家族のよくな関係になったというのにこれは冗談ではないだろうか。悪夢な

ら冷めてほしい。

「何を言ってるんですか、私は私ですよ」

サーニヤ特有の少し高いからつとした口調だ、なのに違う奴がいる。

セミルは茫然としたがあることに気付く。

「まさか、情報がっ！」

「ああ、全くお前たち組織は結束が固くて腰が折れたよ。仲間意識を通り越して家族意識だな」

家族と言われるのは嬉しいことだが素直に喜べない。

アジトの場所も後ろ盾のことも皆、サーニヤの手に渡ってしまっ
た。

「くそっ」

身を翻してアジトへ戻ろうとするがまるで何か透明な壁があるように門をくぐれない。これも魔法か、舌打ちをしながら向き直る。

どうやら戦うしかない。

「取引の材料があるんだが、どうする？」

「断る！！」

「お前たちにとっても悪い話じゃないんだが・・・おっと気が早い」

セミルと話していたカレンにヨルが切りかかる。

だが余裕の笑みでかわされた、それどころか楽しそうに避けている。ヨルの俊敏な動きについて行っているとは流石に総隊長だ。

「身体を久しぶりに動かすからな、手加減できないかもしれない。死んだらすまないな」

かわしながらも急所を突く、その動きには無駄が無く更には間髪を入れない。しかも話しながら打撃を突き出している。その様子に乱れた様子はない。

「つつ・・・」

セミルは初めてヨルが息を呑むのを見た気がした。

セミルたちも今の内に使用人たちの数を減らそうと実行に移すが彼らも動きが増している。こちらには何十倍もいて、それを相手に

したからには疲れているはずなのにその様子を見せない。

それどころかカレンに自分たちを見てもらうかのように動きが良くなった。

常夜（14）

満月が隠れた夜に金属がぶつかりあう音があちこちから聞こえてくる。それと共に悲鳴が上がって闇に溶ける。

「くそつ、これじゃあ駄目だ」

セミルが執事と医者との2人の攻撃を受けている。医者の剣にはあまり重みがないが間髪入れずに正確に急所を狙って出すし、執事の方は服から色々な種類の暗器を次々と披露してくれている。

ヨルを助けに行きたいのにさせてくれない。ちらりとヨルを見るがカレンに押されていて、今、木に叩きつけられた。そんな細腕のどこにそんな力があると思った。

「つつ・・・」

「余所見をしてもらっては困りますね」

思いに耽っていた一瞬の隙を狙って医者がセミルの袖の服を裂き、

浅く血が滲んだ。

「この医者風情が！」

「風情ではなく医者です、しかも国一番の。名前は医者ではなくクラリスです」

クラリスが中指で眼鏡を直しながらセミルに言う。

「は、自分で言うか」

「ええ、カレン様が自分のアピールはしっかりしろと常日頃仰っておりますから」

自分の有能さは過大に言え、それが自分を知ってもらう手だてだ。能力があるのにそれを隠してしまっていたら、いくら優れていても無駄なものとなる。ならば自分は優れていると周りに言いふらし、本当に優ればいいのだ。

「カレン様は私達の全て」

「俺達だってソラーミジュ様が全てだ。身よりがない俺達を、ゴミのように扱われていた俺達を救ってくれたのはあの方だけなんだ」

感情に委せて剣を振るうが容易くかわされる。

「だから、あの方のために、あの方が望む世界に」

そう、私達は似ている。社会の片隅に生きていた自分達を気紛れか、優しさで拾ってもらい、育ててもらった。

だからセミル達はソーミジュのために戦う。けれどもそれはクラリスも同じこと。

勝つのは、より主への愛が深い者だけだ。

だから負けるわけにはいかない、自分たちの愛情は、想いはこんな奴らには負けるはずがない。

キン、と剣をはじく音が2ヶ所から上がった。セミルがいる場所とヨルが戦っていた場所にだ。

一瞬、静けさが戻ったがすぐに地面に膝をつく音が聞こえた。

「がふっ」

口から大量の鮮血が飛び散る。それでもなお立ち上がろうとするヨルの肩をカレンさ無常にも足で蹴り、ヨルは地面に倒れた。

「くっ・・・」

「悔しいか、悔しいだろう」

上から見下ろしながら嘲笑するカレンに顔を歪ませて睨む。最後の足掻きとして唾を吐きだすがカレンに届くことはなかった。

「地獄に落ちろ」

「もう地獄など見たさ」

顔に影を落としながらさらに肩に体重をかけ、捻りあげる。

「ぐあっ・・・!」

「さて、取引があるのだが？」

剣をヨルの顔すれすれのところに刺して微笑む。

いつの間にか空を覆っていた厚い雲は風でどこかに消え、大きく光る満月が暗闇に浮かんでいた。

その光を浴びたカレンが神々しく見える。けれど中身はまるでこの闇のように深く深く、真っ暗だ。

「や、止めてくれ」

突如、周りから懇願が上がる。

カレンはヨルから視線を逸らすことなく、先ほどまで仲間だった人物達の泣きそうな声を聞く。

「サーニヤ、お願い。やめて」

その声は以前、厨房で一緒に働いていた女の声。

「ヨルを殺すなら私を」

その声はカレンに夜伽の仕方を隅々まで教えてくれた声。

必死にヨルの元へと最後の力を振り絞ってマリアやセバスチャン達を押しつけてこようともがく。

「ああ、なんて煩わしい」

漆黒の髪をかきあげ剣を空高く上げる。刀身は月の光を浴びて青白く光る。

「やめてえ、お願い!!」

「やめろお!!」

「皆の者、静粛に!!」

だが突然の野太い声に皆の動きが止まる。
視線は門に向いていて、そこには何十人という宮廷護衛隊が月を背に立っていた。

常夜（15）

「おや、副隊長殿。やっと来たのか」

事態を把握しているカレンはちらりと視線を副隊長、ザンクスに向けた。

ザンクスはその視線に顔を顰めながら苛立たしげに答える。

「隊長、勝手な行動は控えるように常日頃、言っているでしょうが」

「今回は聞いた覚えがない」

カレンはわざとらしく肩を竦めてザンクスの肩の筋肉が動くのを見つめる。

「では言いましょう。剣をお引きなさい」

「副隊長に言われてしまつては従わざるを得ない」

自分の方が格上であるはずなのに、カレンはゆっくりと剣をしまふ。

「では2番隊、義族『常夜』を捕らえよ」

ザンクスが右手を振ると統制が整った2番隊が一斉に『常夜』の残党を縛りつける。何が起きているか理解できない『常夜』達は抵抗もそこそこに捕まる。

そしてヨルも副隊長によって、きつく縄で縛られた。

「絶対に許さねえ」

「サーニヤを拾ってくれてありがとう。お前のおかげで自由に情報が手に入ったよ」

今にも喉笛を噛みつかんとしているヨルに対してカレンは妖艶に微笑んでヨルの頬を撫でた。

「では、またお会いできるよう」

名残惜しく指が離れて2番隊に指示を出す。

「2番隊、『常夜』の首謀者及び残党を牢屋に放り込んでおけ。そして公爵であるソーミジユも捕らえよ」

「はっ」

「ではザンクス、私は明日に向かおう。後は任せたぞ」

「今回の捕縛だけは礼を述べておきましょう」

そう言つとザンクスは2番隊を引き連れたままカレン家を後にした。

残ったのはカレン家の人だけになった。カレンは護衛隊の姿が見えなくなると興味を失つたように門に背を向け歩きだす。

「セバスチャン、マリア、後片付けは任せたぞ」

「はい、カレン様」

カレンはナギに剣を投げて屋敷へと戻っていった。

「カレン様」

アーサーが血のついた衣装を脱ぎながらカレンを追う。しかしそ

れはマリアによって止められた。

「アーサー、戦いが終えた後にカレン様に話しかけては駄目よ」

「なんで？」

「・・・機嫌が悪いのよ。いい？話しかけたら、あなたの胴体と首が真っ二つになっているわ」

「・・・」

そんな自分の姿が容易に頭の中に浮かんできて、アーサーはぞつとした。戦っている時にも、もちろん恐怖はある、しかしそれを上回る恐怖だ。

そんな底知れない物がカレンの中にある。

それは開けてはいけないし、触れてもいけないのだろう。

皆、口には出さないがきつと理解しているのだろう。

だって、マリアさんもセバスチャンさんも皆、カレン様の背中が屋敷の中に消えるまで見守っていたのだから。

常夜（15）（後書き）

長かったあ・・・

もう少いで、この章が終わるでしょう・・・

気付きました？今のダジャレ？

え？うざい？・・・では、もう下がります・・・

裏・常夜（１）

サーニヤに扮したカレンは萎れた花を籠に入れて賑やかな街をぶらぶらと彷徨う。

だが目的がなくうつろついている訳ではない。街で噂されている『常夜』の情報を手に入れようと思っていたのだ。

屋敷に潜入し、宝を奪っていく『常夜』の姿は黒装束で身を包んでいて分からなかったが小柄だったという。ならば、相手は歳もいかずの子供と考えるのが妥当であろう。

そして子供は群れる。群れて自分達を大人から守ろうとするのだ。それというのをカレンは何度も見ていた。

だから目星は子供、カレンは顔を動かさずに視線を左右にやり、誰も聞こえないような声で花を売りながら道端で身を寄せ合う子供を探す。

「花はいかがですか？」

だが街を行き交う大人達は見向きもしない。当たり前だ、誰がこんな萎れた花を手にとるというのだろうか。

それに今の姿は薄汚れた格好、鼻の上に雀斑をかき、髪を染め、お下げにする。化粧もいつものきつい釣り目を隠すように目尻を下

ろすような薄い化粧を施していた。

これという子供がなかなか見つからないな、溜め息をついた時、ふと影がさした。

「野に咲くお嬢さん。その籠に入っている花を全部買おう」

その声に顔が引きつる。

だが、ここではれる訳にはいかない。自分は他国に視察に行っていることになっているのだ。

「まあ、ありがとうございます」

「いえ、今付き合っているご婦人に花を贈るところだったのだよ」

・・・女に萎れた花を贈る奴がどこにいるだろうか。むしろ別れて欲しいために贈るのだろうか。

こいつの頭の中とは一生、相反するだろう。

「僕はハナブキ。心根優しいレディ、君の名は？」

「そんな、レディじゃないです。私はサーニヤです」

知っていると、お前の名前は。

「僕の前じゃ、サーニヤはまるで慎み深い淑女だよ」

カレンのきつちりと縛ったおさげを手にとって弄ぶ。
虫唾が走る。この髪を今すぐにでも切り落としてしまいたい。

「あ、あの」

「真っ赤になるなんて可愛いね」

ああ、怒りで震えているんだとも。今すぐその手を離さなければ、
お前の手首を切り落として二度と使い物にならなくしてやろう。

「あ、あの、もしかしてハナブキさんは宮廷護衛隊の方ですか？」

「ああ、そうだよ」

話しながらカレンの低い鼻を優しく触れるハナブキはどこまでも
ふてぶてしい。

「君はいつもここに居るのかい？」

「ええ、たまに違う場所で売ってるけどここが一番多いです」

「じゃあ、また会いにくるね、サーニャ」

「待ってます。ハナブキ副隊長さん」

ハナブキは花を抱えながらサーニャを後にした。
それを見送ったカレンは残った籠を壁に打ち付けた。

「どこまでも邪魔をする男め」

その籠は見事^{ひつぎ}拉^あげり、使い物にならなくなった。
そしてまた花を取りに屋敷に帰らなければならない。マリアにせ
つかく萎れた花を貰ったというのに、まさか買う奴がいたなんて。
予想外のことにカレンは舌打ちをしながら屋敷へと早歩きで向か
った。

裏・常夜（2）

全く、忌々しい。あの男のせいで一度、屋敷に帰ることになろうとは思ひもしなかった。マリアもカレンが帰って来たのに驚いていたが口には出さなかった。

さすがにカレンが一から世話を見た女だ。カレンの望むことを分かってしたらしく、直ぐに萎れた花を持ってきてくれた。

そして今日も街で花を売り始める。

「お花はいりませんか？」

やはり、ここにはいないか。ここは子供の姿が見えない、場所を変えようと踵を返そうとするがあの甘ったるい花の香りがして頬の筋肉が動いた。

後ろを振り返りたくないと思うが、気付かれた。

「おや、また会ったね」

「ハナブキさん！今日はお一人じゃないんですか？」

顔の筋肉を総結集させて作った笑顔のせいで顔の筋肉が痛い但我慢だ、我慢。

「こちらはサーニヤ、昨日ここで会ってね。サーニヤ、これは僕の悪友、ヨザック」

「誰が悪友っすか。よろしく、サーニヤさん」

「サーニヤで充分です、ヨザックさん」

「俺もヨザックで構わないっすよ」

「こらヨザック、私のサーニヤをとるなよ」

誰が、お前の「サーニヤ」だ。架空の人物と勝手に恋に落ちていろ。

カレンが恨みごとを言っているとハナブキがカレンの手の甲に唇を落とした。

本当はこの手を奴の腹へと埋めたいのだが、年頃の娘らしく赤くなる。

「ハナブキ副隊長、もうナンパ副隊長って呼びますよ」

それはいい、とカレンも納得し、お腹を抱えて笑いだした。似合っている、まさにナンパ副隊長だ。そこに「年中発情期」とでもつけてほしい。

「お前が余計なことを言うせいで笑われてしまったじゃないか」

「あ、ごめんなさい」

カレンは笑うのを止めて2人を見る。

どうやら『常夜』の調査だろう、国王在住の城下に義賊が出たと噂されれば他国からの国王の心証が悪くなる。

「お二人はデートですか？」

「違っつて！こんなナンパ副隊長に任務以外で会いたくない」

「おや、君の本音がよく分かった」

ハナブキはヨザツクの頭をかき回し髪を乱した。こうして見るとじゃれ合う子犬のようだ、いやただの鼻垂れ子^{ガキ}供か。

「じゃあ今日も任務なんですか」

「ほらみる、君のせいで台無しじゃないか」

「あら、何の任務かしら？」

「これは内密なんですがね」

「内密じゃ話しちゃ駄目じゃないすか」

全くだ、そんなもったいぶらなくても、こっちは全てを知っている。ハナブキはカレンを甘くとりけるように見つめながら人差し指を動かして唇をなぞった。

「サーニヤ、君は『常夜』のことを知らないかい？」

「『常夜』ですか？」

「ああ、そうだよ」

「申し訳ないですけど、私分かりません。ただ民に優しい人たちとしか」

「ありがとう。そうだ、今日も花を頂こう」

「ありがとうございます」

・・・切実に何も買わずに帰ってくれ。

ほら見る、ヨザックも何でそんな萎れた花を買うか分からないという表情をしている。もちろん私も分からないため言うことができない。

2人が見えなくなつた途端に今度は側にあつた木の箱を蹴り飛ばし、粉々にした。

また屋敷に戻らないといけなくなつた。

もう一度、戻つた時にはマリアはまた何も言わずに今度は腐つた花が混じつた花束を渡してきた。

裏・常夜（2）（後書き）

以外に短気

実は虹乃も短気・・・直さないとなあ

裏・常夜（3）

今日はどんよりと曇った空、商売をする人はあまりいなかったがカレンは今日も街を歩く。いつもよりも夜が更けるのが早く人々はさっさと店じまいをする。

「花はいかがですか？」

しおれた花を籠につめて夜が更けた街を歩く。

この間の煩わしい万年常春の奴が来て、殺意が沸いた日からもう一週間近くになる。もうハナブキは来ないだろうと安心しているが、ちらりと周りを見渡す。

ふむ、副隊長のハナブキが所属する5番隊の下っ端が町民の格好をしながらカレンをちらちらと怪訝に伺っている。そうだろう、こんなどこにでもいる娘が常夜の一員だと思う方がおかしい。だが、見た目で判断してはいけなさと教わっていないのか。

下手くそが、だがそうなるように仕向けたのは自分だ。

ハナブキと別れる際に自分が常夜と関わりがあるだろうと仄めかしていたのだ。まだ関わりは無いだろうが、これから仲良くなるのだ。順序は違うが、まあ一緒だろう。

「おら、どこ見てんだ」

「わっ、すみません」

考えことをしながらふらふらしていたため、柄の悪い人たちにぶつかってしまった。どこにでもいそうな男達に笑いが込み上げてきそうになる。

どこも同じような者がいるものだ。

「おい、嬢ちゃん。ぶつかっておいて御免で済む訳がないだろ」

「すみません、すみません」

何度も謝るが男はか細い腕を掴んで下卑た笑いを顔に浮かばせながら顔を近づけた。自分より大きい顔が近づいて身を引いた。

気持ちが悪い、しかし人が見ている場所で細腕の女が巨漢の男をなぶり殺しとなっては噂がたつ。

「嬢ちゃん、可愛い顔してんじゃないか。どうだ、一晚相手してくれたら許してやってもいいぜ」

「や、やだ」

拒否して手足をばたつかせるが男は屈強なためびくともしない。

「大人しくしろ」

「ふ、むー！」

好都合だ、ご注文通り殺してやろう。

だが、まだ人の目がある。仕方がなく、世間一般の対応をして男

の毛むくじやらの腕にかみつく。

吐き気がしたが、あとで洗えば何とかなる、かもしれない。

「このあまぁ！」

殴ろうと男が振りかぶった。

後ろでカレンをつけていた隊員が飛び出そうとする。

もう少し、待て。

その思いが通じたのだろうか、一人の男によって救われた。

少年と言えるほどの華奢な男が立って男の拳を受け止めていた。

「おい、あんた。女に暴力なんて振るうもんじゃないだろ」

そして暴漢の太い腕を捻り上げた。相手より細く小さい姿なのに力負けしていない。

「いででででっ！」

みしつと骨が軋む音がした。

「今日は退いてやりゃあ」

負け犬らしく言葉を残して腕を押さえながら大通りへと出て行った。

「大丈夫か？」

「ありがとうございます」

差し出された手を取り立ち上がった。腕を掴んで、カレンは笑みが隠せなかった。

見つけた、これが常夜だ。

男の筋肉が引き締まり、余分な肉がない。カレンは触っただけで男が何かの武人か、または盗賊だと目星をつける。

しかし、武人はもつと筋骨が隆々としているし、また足の筋肉が発達していて逃げ足が速かろうと推測する。

小奇麗な顔の男が山賊などとは似合わないし、何よりアーサーが見た男の特徴と一致する。

「怪我はないかな」

「はい、大丈夫です」

カレンは自身に怪我が無いか見た。その際に先程わざとつけた傷跡を見て声お漏らす。

「って、足を擦りむいてるじゃないか」

「え、あ、本当。いつ出来たのかしら」

「きなよ、手当てしてあげる」

常夜というのは、やはり民に甘いようだ。正義の使者は大変なものだな。

カレンは半ば引きずられるようにして後をついていった。

男は尾行されているのに気がついたらしく、意識を周りに向けるとカレンを抱えて走り出した。

その見事な逃げ足で隊員達はまかれてしまった。

「あの、ここは」

「ん、遠慮しないで。僕たちが住んでる処だから」

そう行つて連れられてきたのは街外れの廃墟だった。

もう何十年も人が住んでいないのか、あちこちに埃が溜まっており空気が濁っている。

「あの、言い遅れましたが助けてくれてありがとうございます」

「いいよ、はい、できた」

手際が良いのか、足に巻かれた包帯は少し動いても取れそうになり。
い。

「本当にありがとうございました」

「いって。送ってくよ、家どこ？」

途端にカレンは顔を曇らせる。

「私、家が無いんです」

「なんで」

「親に捨てられて、夜も寝る処を転々としてて」

ぎゅっと染み汚れたスカートを掴んで目に涙を湛える。

「ちよ、泣くなよ。泣かれると困る」

「すみません。だからいいんです。今日も雨風を凌げる場所で寝ますから」

涙を拭って笑顔で青年を見つめた。

少し、演技が臭いと自分でも思ったのだが大げさの方がいいだろう。

「あー、もう」

頭をガシガシしたと思ったたらカレンを見てぶっきらぼうに言った。

「いいよ、ここに泊まりなよ」

「そんな、そこまでしてもらうわけには」

「女の子が外で泊まる方が危ないっつの」

そう言うとはいいと薄い毛布をカレンに渡して自分も汚れた毛布にくるまって二人でくっついて寝た。

寒い、と思ったがこの程度の寒さには慣れている。

カレンはずっとこちらも窺うようにして寝たふりをしている男の背に自分の背中を当てて、浅い眠りについた。

裏・常夜(3)(後書き)

肩が痛い・・・

特に左

はっ、何か憑いている！？

裏・常夜（４）

カレンは部屋の中に誰かが入ってくる気配を感じ取った。男だ、かなり大柄の。こちらの気配を感じ取っているのが窺えるがカレンは寝たふりを続けたがあまりにも大きな声を出されたため起きざるを得なかった。

「おい、ヨル起きろ」

「う、んー」

まだ寝ぼけているヨルを置いて、カレンは精悍な顔をした男に尋ねる。

「誰？」

「お前こそ誰だ？」

屈強な男はその巨体には似合わない動きでナイフを取り出し、首に押しつけた。

「つつ・・・」

かなり手だれているようだ。薄皮ぎりぎりで、こちらの反応を見ている。

カレンが少しでも反撃に出ようというものなら首と胴体がお別れになっていることだろう。

「何だ、女か」

抵抗もせずに震えているカレンに男は警戒を解き、ナイフをポケットにしまった。だが神経はこちらを向いていて、いつでも攻撃できる位置にいる。

そしてまだ寝ているヨルを足蹴にした。

大きな音を立ててヨルは壊れたソファから落下した。

「つてー！あれ、セミル」

セミルと呼ばれた男はヨルを組み敷き顎でカレンをしゃくる。

「ヨル、あれほど動物は拾うなと言っただろう」

動物扱いか、まあ人間は哺乳類だしな。妙に納得してカレンは2人も見つめる。

「だってさー、あの子襲われそうになってたんだよ」

「そのまま見捨てておけばよかったものを」

本人を前にして言うことではない。つまり、この男はカレンの反

応を気にしているのだ。

おもしろい、なかなかの策士だ。

「で、お嬢さん、とつとと出て行ってくれないか」

「おい、セミル。そんじゃサーニヤを一人にさせるのか」

「お前は馬鹿か。こんな女一人に構ってたら捨て子を見たら全員拾うのか。俺たちにそいつらを養う財力も力も無いってのに」

確かにこんな処に住んでいる男が相手を養うなど出来る訳がない。人を養うということは生半可な気持ちではできないのだ。

黙るヨルにセミルは頭をかき、分かったよと諦めたようにぶつきらぼくに言った。

「女、何ができる？」

「何って」

「暗殺、密偵、情報収集、さあ選べ」

選択しが三つしかない。しかもどれも一般の人が出来ることではない。

初めて会った相手にいきなりそれを聞くか。

はっきり言ってカレンはこの3つともできる。しかも優秀なほど。だがそれを悟られてはいけない。

カレンは鼻の上に書いた雀斑を掻きながら、ぽつんと言う。

「・・・料理ならできます」

「ああ！？料理だあ？んなもん、誰だって出来るわ」

「ご、ごめんなさい」

ふざけすぎたようだ。

本気で怒る男には申し訳ないが、まるで般若のような顔だったと思っ
てしまった。

「セミル、苛めないでよ」

「ちっ、別に苛めちゃいねーよ」

「も、もしかしたら情報収集や伝言と届けることなら出来る、かも
しれません」

これくらいが妥当だろう。

だがその言葉にヨルは笑顔になった。

「まあ、いいじゃん。人も少ないんだし」

「ちっ、これだからお子様はこまるぜ」

「すみません」

お子様という程の歳ではないのだが。
明後日の方向を見ながらも謝る。

「それに大丈夫だよ。彼女、武術の基本すら知らない女の子だし気配にも敏感じゃないと思うし」

やはり先程、寝ていると思わせていたのは私の不信感を見るためだったか。

だが、残念だ。化粧は自前だが手の胼胝たじはナギに消してもらった。

自分を見破れる人物などいない、確かなものを感じ取り、カレンは悠然と微笑んでみせた。

裏・常夜（5）

カレンは数カ月の情報収集の成果が良かったせいか、やっと彼らのアジトに連れて行かれた。

まさか表では宿屋をやり裏では義賊だとは思わなかった。しかし確かに敵を欺くには有効な手段だと思う。

だが、この宿屋、すごく寂れている。こんなので人が集まるというのだろうか。まあ、元々宿屋が主な収入源ではないのだから関係はないのだろう。

しかし心配は杞憂だ。安さが自慢の宿屋は値段の割には風呂もあるし食事などは自家菜園をしているため、そこから採れる野菜を使っているため費用などあまりかからないようだ。

「あの、ここが本当にアジトなのですか？」

「そうだって」

「でも、失礼ですが、こんなところで情報を集めたりできるのですか？」

「ああ、情報は貴族に勤めてる奴らが聞いてくるし資金は貴族から貰える」

「貴族？」

「ああ、・・・って、おお！これは秘密だった。絶対、今のセミルに言っなよ。言ったら殺されるからな」

やはり、まだ駄目か。

自分からこの義賊に乗り込むと言ったものの、いい加減2カ月という月日は面倒だ。

しかし下働きから少し上になったようだ。

こうやって『常夜』は自分が信頼に値するかどうかを確かめているのだろう。そしてセミルのお目にかかったもののみが更なる役を与えられる。

「私はここで何をすればいいんですか？」

「礼儀作法を身につければいいんだよ」

「礼儀作法？」

「ああ、ここで一、二年ほど身につけて次はどっかの貴族にもぐりこんでもらうの」

なるほど、これは次に進むための計画のためか。
だが一年もかかるなど、待ってられない。

「えと、私、生まれは中級貴族でしたのである程度の作法でしたら大丈夫です」

「貴族！」

「と言っても落ちぶれましたが。私の父の代で没落してしまったせいで家族がばらばらになったんです」

「なんか、ごめん」

「いえ、もう過ぎたことですから」

「じゃあ、早く貴族の処に潜りこめるな」

「そうですね、頑張ります」

ここでは宿屋として通常業務をする傍らで情報を仕入れた時の仲間への伝え方、もしばれた時のかわし方、身の守り方、また誘惑の仕方を教わった。

「あの、誘惑は必要なのですか」

「当たり前だ。もしかしてお前、処女か」

「なっ！！」

なぜ男と誘惑の仕方について議論しなくてはいけないのか。

そして恥ずかしげもなく処女というセミルに怒りを通り越して呆れを感じる。

「今のうちに好きな奴にでも抱いてもらえ。もしいなかったら俺が相手してやるよ。貴族のでっぴらした奴らよりマシだろ」

ちらりと目の前の人物を観察する。確かに顔や見てくれはいいだろう。

顎に髭は生えているが、それはむしろ彼の顔を引き立たせ似合っている。まさにセミルは男という言葉が当てはまる。

「け、結構です!!」

裏・常夜（6）

とある宿屋

情報収集のためには寝ることを教えられた。先にいた同じ年頃の先輩たちは既にセミルやヨキ、またはここに泊った旅人と事を終えているようだった。

結局、誘惑の仕方を先輩たちから教わったり本を借りたりして勉強した。

なぜ色事にこれほどまで張りきらなければならぬか後悔が混じったが、一番情報を得やすいのはベッドの上だから仕方がない。

「おや、サーニヤはセミル様とはしないのかい？」

艶めいた先輩がサーニヤの鼻の上の雀斑を撫でながら片目を瞑って悪戯っぽく笑う。

「しません!!」

サーニヤの反応が可愛いため、ついついからかってしまう。こちらが冗談で言っているのに顔を真っ赤にして本気で拒否をしているサーニヤのが愛らしいのだ。

顔を真っ赤にしながらも、ぶちぶちと拗ねているサーニヤに春本を見せる。春本というのは男女が絡み合っている絵だが、それを何の脈絡も無しに見せられたサーニヤは慌てている。

「あわわわわ」

ばたんと本を閉めて潤んだ目で見上げるサーニヤを女でありながらも押し倒したいと思う。

「全く、こんなんじゃ情報を聞き出せるのかい」

「だってええ」

まあ男という生き物は単純だから、直ぐに教えてくれるだろう。それにこの子には純粹のままできて欲しい。

そう思うと、こんな世界に入ってきてしまったサーニヤを気の毒だと思ってしまう。

ある日突然セミルとヨルが連れてきた、どこにでもいそうな女の子。しかしセミルはこの子を私達と同じように育てるという。

確かに今は人手不足だ、しかしこんなに鈍くさそうな子を連れてこなくても最初は思ったがこの子は特別かもしれない。毎日、何らかの失敗はする。しかし可愛い失敗でついこちらを緩めてしまう。ここにいて、あたしらは親にも世間にも見捨てられて笑うことも無くことも無かったというのに、この子を見ていると笑顔になってしまう皆がいた。

「サーニヤ、あんたは変わらないでね」

「・・・ん？はい」

サーニヤはきょとんと首を傾けながら分かっていないような顔で

返事をした。

とあるカレン家

マリアがアーサーからカレンの手紙を受け取りながら朝の仕度をしていると、まだ寝むそうなナギときちんと仕度をしたクラリスが出てきた。

この2人はつくづく対照的だと思う。

まるで鳥の巣のようなぼさぼさの髪と、まるで本人の性格を表しているような直毛。

マリアは挨拶をしながらカレンの綺麗な、だが簡潔なことしか書かれていない文章を見る。

「ナギ、クラリス、それともあなたかしら？」

「何がです？」

クラリスは眼鏡の縁を押してマリアの持っている手紙を見ようとする。

しかし、ふいとそらされた。

「・・・」

「なにか？」

笑顔のマリアと手紙を見比べて溜息をつく。

「いえ、何もございません」

目の奥が冷え冷えとしているが何も言わない。

カレンがいないこの屋敷の主人はマリアなのだ。カレンがそう言っただから従わなくてはならない。

いや、従うしかない。

「誰か、今日の夜に暇な人はいるかしら？」

「・・・カレン様からか」

セバスチャンが気配なくマリアの横に近寄って手紙を一瞥する。

「そうですね。だれか暇かしら？」

「ボク暇だよ」

カレンという単語で一気に覚醒したナギは、よれよれのサイズの合っていない白衣を着て手をあげる。裾が余っているために手が見えなかったが。

「待て、お前・・・今日は国王に呼ばれていただろう」

「・・・知らない。だってカレン様に勝るものなんてこの世にないし」

「じゃあ、クラリス。あなたが行くのね」

ぷくつと顔を膨らませて反抗するナギをそのまま放置してクラリ

スに詳細を伝える。

それを聞いたクラリスは頭を傾げたが直ぐに用意を整える。

『暇な男 変装 宿』

たったの3つの単語だがマリアはカレンが言いたいことを分かった。だてに30年以上一緒にいないのだから。

本当は自分が行きたい位であるがカレンが望むのは男だ。

なぜ男なのだろうと考えない。

そんなことはカレンは望んでいないのだから。彼女が欲しいのは男で宿に来るだけなのだから。

クラリスは髪を一般的な茶髪に変えて、眼鏡も外して旅人の格好をする。

そしてカレンが潜入している『常夜』の宿へと入った。

「あら、お泊りでよろしいですか？」

「はい」

自分の顔は目立ってしまう顔立ちなのは理解している。

また普段から眼鏡がなくても困らない生活を過ごせるがカレンから初めてもらったのがこの眼鏡のため、いつも愛用しているが旅人には似つわしくないため、やむを得ずにはずした。

それにしても寂れている宿屋だ。

小奇麗ではあるが、廊下の壁にはいくつもの染みが広がっている。

泊る部屋に入ると、これまた一人が窮屈しない程度の広さだ。

「じゅっくり」

案内してきた女の動きは洗練されている。

またすれ違った女達も同じような動きだったため全員が駒であると理解できた。

荷物を下ろして自ら用意されている茶を注ぐ。

その間、屋根裏や横の部屋から気配を感じられたが気付かない振りをして自然な動作でくつろぐ。

そういえば、休暇などなかったな。久しぶりにゆっくりできるかもしれないと思って首を回した。

「失礼します」

いつ聞いても安心する声が聞こえた途端に集中する。

自分の失敗などいくつあっても良いが、彼女の用件だけは決して不完全であってはならないのだ。彼女を失望させることは自分の存在を否定することになる。

「夕餉の仕度ができました」

そう言って襖を開けて案内してくれた女と同じような服に身を包んだカレンが中に入ってきた。

そしてテーブルの上に夕餉の仕度をしていく。

「どこからいらしたんですか？」

「隣の国から各国を放浪しているんですよ」

「まあ、大変な道のりだったんではありませんか？」

「いえ、それほどでもありません」

「慣れていらっしゃるんですね。それではここでゆっくりと旅の疲れを癒して行ってくださいな」

カレンはクラリスの肩に両手を置いて媚びるような仕草をして立ちあがる。

それでは、と言って襖を閉めて去って行った。

「・・・」

まさか、と思っただけを探る。

やはりだ。自分の思っていた通りだ。

カレンが出て行った後に周りが色めき立つ気配がした。

まさか、他人に見られながらとは。
悲しく思いながらも、心のどこかで薄暗い歓びが浮かぶのが分かった。

そしてクラリスが敷かれた布団の中に身を休めようとした時、襖の外から良く知った気配が感じられる。

「もう寝られましたか？」

「・・・いえ」

クラリスは身を起こして襖を開けると俯いたままのカレンが入ってきた。

そのまま、枝垂れかかるようにクラリスの胸に倒れこむ。

「私、あなたのことが一目で気に入ってしまったんです。どうか、今だけ」

そう鼻と鼻が当たる距離で囁かれながら、カレンに服を脱がされる。

「ちょ、何を言って」

「お願いします。あなたが私の知っている人によく似ているんです。どうかその人の代わりを・・・」

涙ながらに訴えられて言葉を詰まらせる。
その隙にカレンは敷いてある布団の上に一緒になって倒れこみ、
主導権を握る。

「宮廷に情報を流しながら、調べさせる」

睦言を言いながら耳元で指示を出す。

クラリスもそれに答えながら掴んだ情報を与える。

「宮廷でもかなりの人物だと調べています」

「そうか」

「5番隊が指揮を執っているようです」

「あいつか」

ちつと舌打ちをしながら自分も服を脱ぐ。

薄暗い光ではカレンの身体は見えないが無駄な肉は全くないため
優美な線を描いている。

きめ細やかな肌に手を這わせながらクラリスはカレンの為すがま
まにされている。

「情報が入り次第伝える」

「はい」

話が終わったとばかりにカレンは上に乗って一気に果てさせる。

そうして事が済むと、クラリスが寝るのも見計らって出て行った。

裏・常夜(6)(後書き)

なんだか淡泊になってしまった・・・

裏・常夜（7）

本来は数年、侍女の勉強をしなくてはならないがサーニヤは礼儀作法、身のこなしが教えられた以上のことをしたためほんの半年で済んだ。

まあ当然だろう。カレンは伯爵の地位を持っているのだから。

「本来はどんな奴でも数年たたないと配置させないが人数不足だ。奉公させに行かせる」

「ありがとうございます。必ずご期待に添えられるよう頑張ります」

前まではセミルの目も見ずに会話をする、という不貞をわざと働いていたが人間は成長していく生き物のため、だんだんと目を合わせていった。

「期待しているぞ」

ここでは仲間意識というよりも家族意識というほうが相応しい。カレンも一緒に働く女達や男達に気にいられ兄妹のような関係に発展した。

表面では皆の妹のように扱われるのを頬を膨らませて怒っているが、実際は愚かとは思わない。働く仲間といえども、仲間という以上の意識を持っていけない。もし仲間がその場で殺されたら冷静な判断ができなくなってしまう。だから深く関わりすぎてはいけない。

「ですが私は誰の紹介で奉公に行くのでしょうか」

いよいよ黒幕の登場か、長かった、実に。当然調べればそれなりのボロは出てくるはずだ。だが、それを知っているのは給仕中の人物とヨルとセミルだけだ。おいしいところまではいった、しかし後少しは難しかった。

「ソーラミジエ公爵の紹介だ」

「え、あんなに有名な貴族が後ろ盾でしたの」

これは、なかなか驚いた。

ソーラミジエ公爵は前国王の叔父にあたる大貴族だ。ソーラミジエ公爵は慈善活動をしていて幾つもの孤児院や資金活動もしている。公爵というのは名前だけであり、あとはただのお飾りであったはずだ。

そんな人が裏では『常夜』の後ろ盾だったとは。

確かにこんな大掛かりな組織をまとめるには有名な貴族がいると思っていたがソーミジユ公爵だったなんて。

もともとカレンは慈善活動とやらをする貴族などはあまり好ましくなく、むしろ関わらないようにしていたが慈善の裏には影があると再認識したところだ。

「それで私はどこの屋敷に奉公に行けばいいんです？」

「カレン伯爵の処だ。丁度、話があがったそうだ。あそこは手強いだろう、だからまずは信頼を勝ち取れ。それまでは連絡するな」

「私にできますか？私よりもっと適任者がいるかと」

・・・実家か。

だが何故カレンの家か、もっと適任者がいるはずだ。初めての奉仕に宮廷護衛隊の隊長の処に行かせるなど身の程知らずであろう。

「本来ならな、ベテランを行かせるべきだが伯爵は宮廷護衛隊の総隊長だ。気配に敏感だろう、お前はまだ慣れていないだろうからへ

まをしる」

「へ、へまをしていいんですか」

「公爵の紹介だからあまり大きな問題は起こすな。けれど害が無いとアピールしろ」

難しい注文だ。へまをしながら無害アピールなんて、上手くいくのだろうか。

「不安か」

「当たり前です」

セミルはにやつとニヒルな笑みを浮かべながらサーニヤの頭をぐしゃぐしゃかき混ぜる。

「ちょ、ちょっと」

髪がぼさぼさになる。

男に髪を触らせるなどカレンが許したはずがない。しかしセミルの手の動きには厭らしさが全くなく、むしろ同じ異性の仲間にやるような仕草だったので大人しくしていた。

「うー、失敗しませんように」

「おい、俺は神でも何でも無いんだからな」

セミルは呆れたように言った。

「当たり前です。この世に神などいません」

この世に神がいたのならカレンは帰っていたんだ、何も知らずに平和なままに。そして地獄を見ることもなかったのだ。だからいもしない神に祈ることなどしない。

「そりゃ、そうだな」

初めてセミルと意見が合った気がした日となった。

裏・常夜(7)(後書き)

台風すげええええ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6691q/>

渴愛

2011年7月22日13時29分発行